

信州環境カレッジ「学校講座」を利用しよう！

～「つながる学習」のすすめ～



目 次

はじめに	2
1. なぜ「学校講座」か.....	3
2. 信州環境カレッジ「学校講座」とは.....	6
3. 学校講座の実践例	12
4. 「学校講座」を使おう！	52
5. 地域にコーディネーターを育てよう	56
資料1：「つながる学習」実践例	60
資料2：「打ち合わせシート」（参照書式）...	61
おわりに	62

令和2年3月

信州環境カレッジ運営事務局

はじめに

この小冊子は、長野県「信州環境カレッジ」の「学校講座」の利用を推進するために作成しました。

小・中・高等学校の教育関係者、地域で環境保全に関わって活動されている民間団体の方々をはじめ、より良い環境づくりやコミュニティスクールの推進、青少年の健全育成などに関心を持つ方々にお読みいただくことを願っております。

長野県は、国連の SDGs（持続可能な開発目標）達成に向けて優れた取組を提案する「SDGs 未来都市」として、平成 30 年 6 月、他の 28 自治体とともに、全国で初めて選定されました。

県は、総合 5 か年計画「しあわせ信州創造プラン 2.0」の推進に当たり、世界的な課題である SDGs を意識し、誰一人取り残さない持続可能な社会づくりに取り組むとともに、SDGs の理念を信州から世界に発信することを目指しています。

「しあわせ信州創造プラン 2.0」は、SDGs の目標年度と同じおおむね 2030 年の長野県の将来像を展望し、これを実現するための 2018 年度から 5 年間の取組をまとめたものです。その副題に「学びと自治の力で拓く新時代」を掲げ、学びの風土と自主自立の県民性（学びと自治の力）を再認識し、最大限発揮することで、誰もがしあわせに暮らすことができる長野県を目指しています。

信州環境カレッジは、県民の「学びと自治の力」を引き出す施策として、平成 30 年度より始まりました。

この小冊子では、県総合計画のこうした位置づけと SDGs への貢献を念頭に、地域や世界とのつながりを感じることでできる学びとして、「学校講座」が利用されることも願っています。

作成にあたり、開始から 2 年間の「学校講座」の仕組みを利用した実践事例などを参考資料として、学校と地域の連携による環境教育に努力されている県内各地の方々による公開座談会を開催しました。

この小冊子には、学校と地域を、環境をテーマにつなぐ取組みのヒントが盛り込まれています。地域での活動の参考にさせていただくとともに、お読みになった感想などを事務局にお寄せいただければ幸いです。

■ SDGs と ESD

今、私たちは未来に向けて重要な局面に立っています。グローバルな地球環境問題は、要は自分たちの足元にある地域環境問題であり、地球温暖化や自然災害、資源の枯渇、感染症の拡大など日常の話題です。こうした局面を迎え、国連は 2015 年に 2030 年までに達成したい人類共通の目標として、17 項目に整理した「持続可能な開発目標（SDGs）」を発表しました。

近年、SDGs は急速に広まりましたが、これはスタイルの流行ではなく、悪化のシナリオに向かう環境社会に対して強い危機感を発信するメッセージです。今、本気で取り組まねばならない SDGs を達成するには、「持続可能な開発のための教育（ESD）」が不可欠と発表されました（国連、2019 年 12 月）。持続可能な社会をつくるためには教育こそが重要だとする考えからで、ESD は教えられたことを鵜呑みにする教育でなく、自ら調べ、考え、語り合い、方策を見出していく課題解決型の学習を進め、さらに行動に移す一連を意味します。ですから環境教育だけでなく、福祉教育、人権教育、平和教育など他の教育分野でも共通するものであり、ESD は地域の子どもから大人まで、すべての人が取り組むことでその効果が高まる人類のための教育です。

■これまでの教育とこれからの教育

地域での ESD は地域社会や企業、家庭、個人に委ねられます。一方、学校教育の詳細は「教育基本法」に基づく「学習指導要領」に規定されます。10 年に一度改定される「学習指導要領」の変遷を見ると、ますます ESD の重要性が高まっています。

■「地域をつくる人」をつくる教育

地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部が（H27）年に改正され、地方教育行政は教育長に責任者が一本化され、「教育大綱」を首長が策定することになるなど、教育と地域行政の連携が法律で強化されました。つまり、これからの教育は政治的中立性の高い教育委員会と、政治の執行部局である地方自治体が、お互いを認めながら連携する運用に変化しつつあります。そこではグローバル化に伴う変化の激しい社会で、かつ、高齢化と人口減少が進む日本社会において、持続可能な地域をつくるための人づくりが意識されます。地域の学びの中心である「学校」が持続し、地域住民に開かれ、子どもも大人も共に地域課題や地球課題を学び、考え、行動するなど、地域の教育機関として学校を捉える必要があります。

表1：21世紀の学習指導要領の変遷と教育基本法の改訂

	改訂のテーマ	取り組まれること	方向性
2002年	学習指導要領（H14） 基礎・基本、生きる力	教育内容の厳選（削減、簡略化） 総合的な学習の時間を新設	経験主義（ゆとり教育）
2006年	●教育基本法改訂（H18） 調和と自立、公共に資する、 伝統の継承、未来を切り拓く教育	60年ぶりの基本法の改訂 目的と目標の変更 生涯学習社会へ 学校の専門性を高める	国家の形成者から公共を支える自立した個人へ
2012年	学習指導要領（H24） 生きる力、育成のバランス	授業時数の増、指導内容の充実 小学校外国語活動の導入	系統主義（ゆとり教育のバランス修正）
2022年	学習指導要領（R4） 生きる力、持続可能な社会の創り手	主体的、対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング） 何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶか	「持続可能な社会の創り手」が前文に明記される

文部科学省資料を基に中澤が作成

■学校教育にとって安心できる環境をつくる

しかし、学校にとって児童・生徒の安全は最重要項目です。身体の安全、心の安全、集団の安全、施設の安全等を守るために、多くのルールがあり、教職員は多種の安全に心を砕いています。特に小学校では児童の判断能力から指導者の責任範囲はより大きくなります。また、学級担任制が大多数であることから先生は毎日・毎時間が授業の連続です。しかも、数年でクラス替えや転勤があるため、同じ学年の授業指導を短期間で蓄積し、地域課題や最新の科学や社会情勢を理解して教育題材とすることは容易ではありません。

一方で、先生は児童生徒のことを日々見ており、発育支援と学び方の専門家です。これからの学びは「どう考えるのが正解か」ではなく、新しい指導要領にある「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」であり、それを中心となって支えるのは教育の専門家である先生です。

地域の団体が学校に出かけていく学校講座では、以下のことが重要です。

地域団体は準備に手間がかかるものの、地域課題や地球社会の現実に基づく実体験を児童生徒に提供するため、事前に先生と十分な打合せを行うことで、学習の目的と安全管理を理解できます。また、体験は学年に合わせた内容で、メッセージについては価値を伝えるのではなくオープンエンドにすることで、先生が後の授業につなげやすく、教育効果が増します。



一方、学校側では先生が児童生徒の現状、そして総合的な学習の時間・各教科との関連を整理しておき、地域講師と教員の役割や、事前事後学習を学習者目線で進める工夫が求められます。先生が地域課題を選ぶことは難しいかもしれませんが、できる範囲で調べ、ちょっと手を伸ばせば解決できそうなテーマで、かつ、教科の単元と関連して体験できるものを選ぶのがポイントです。また、体験そのものは楽しいのですが、思い出づくりだけで終わらないためにも一連の授業デザインは重要です。こうした相互の事情を踏まえると、学校講座では最初は団体が学校に寄り添う姿勢が重要であると考えます。

ただし、これだけのことを地域団体が有志で、先生が通常業務に加えて行うことは、双方にそれなりの作業量と負担が想像されます。本報告書には団体と先生をつなぎ、作業を積極的にサポートするコーディネーターのあり方（機能・役割）についても検証していますので、ぜひ参考にしてください。ただし、地域によりこの連携の形は異なるでしょう。



2. 信州環境カレッジ「学校講座」とは

■信州環境カレッジ

信州環境カレッジ（以下「カレッジ」という。）は、長野県が、環境に関する「学び」を拡大し、持続可能な社会を支える人づくりを進める仕組みとして、2018（平成 30）年度より開始した事業です。

カレッジは、学びの場づくり（講座情報の発信）、人づくり（地域のリーダー育成）、ネットワークづくり（交流会の実施）を柱として事業を行っています（図 1）。

カレッジの WEB サイトには、環境団体等が学校講座や地域講座において提供できるプログラムが紹介されています。

■学校講座

学校講座は、学校からの申込により開催する出前講座です。

カレッジの WEB 上に登録された活動団体が提供するプログラムを、学校の授業や課外活動で利用していただけるように紹介しています。学校からの申込みにより調整が始まり、指定された書式による申請書などの提出により、プログラムを提供した活動団体に講師料などの必要経費に対して 2 万円を上限に補助されます。

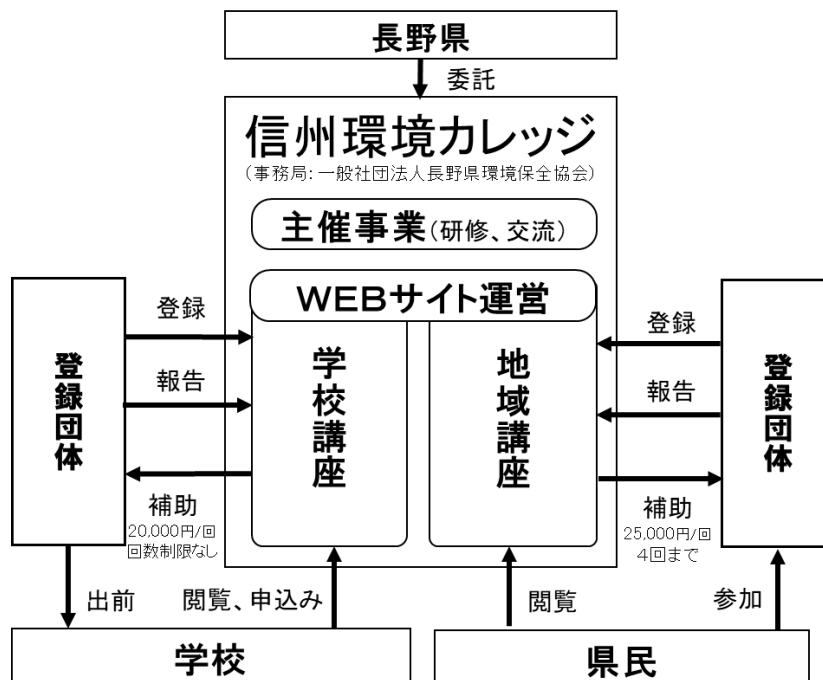


図 1：信州環境カレッジの仕組み

■コミュニティスクールなどとの違い（図2）

文部科学省の方針の下、各地でコミュニティスクール（学校運営協議会制度）が取り組まれており、校区内の有志が学校に出かけて講師などを担って、学校運営を支えています。

カレッジの学校講座は、長野県内の活動団体であれば、校区は関係ありません。

なお、現在、コミュニティスクールの一環として取り組まれている出前講座であっても、環境保全やSDGsに関係するものであれば、カレッジの「学校講座」に登録することが可能です。

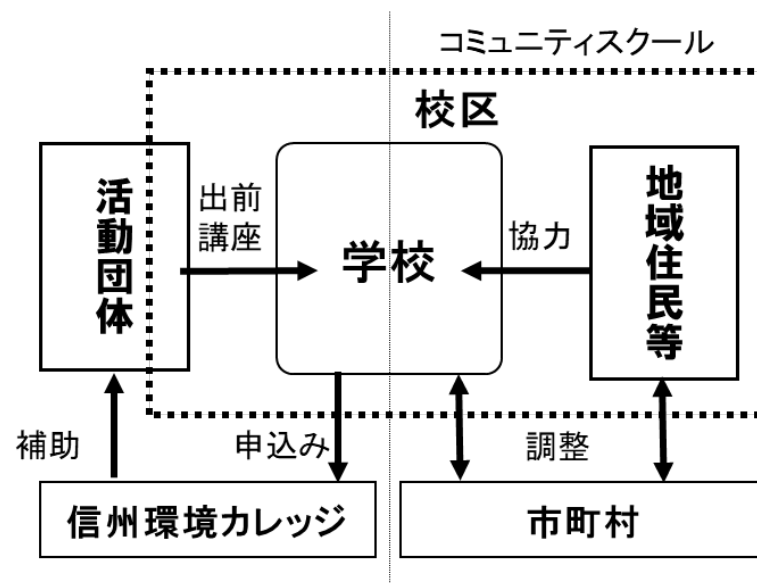


図2：信州環境カレッジとコミュニティスクール

(参考) 地域講座

地域講座は、活動団体が主催する講座です。

一定の参加人数(20人以上が目安)が見込める講座の開催を対象としています。カレッジのWEB上に講座が登録されると、活動団体はこれを利用して幅広い県民に参加をよびかけることができます。さらに、指定された書式による報告書などの提出により、最大4回まで、必要経費に対して上限2万5千円が補助されます。

地域での自主的な学びの活動を県が補助する仕組みです。

表2：学校講座と地域講座への補助金交付について

補助金の交付				
種類	要件	補助金の上限	対象経費	補助を受けられる回数
地域講座	① 「信州環境カレッジ講座」として年間2講座以上登録し、開催すること ② 個人、NPO法人又は任意団体が開催する講座であること ③ 2019年4月～2020年2月末日までの間に開催する講座であること	講座1回当たり 上限25,000円	① 講師経費 ② 会場・機材使用料 ③ 教材費 ④ 広報費 ⑤ スタッフ経費	最大4回まで可能
学校講座	① 「信州環境カレッジ」に登録した講座であること ② 個人、NPO法人又は任意団体が開催する講座であること ③ 2019年4月～2020年2月末日までの間に開催する講座であること	講座1回当たり 上限20,000円	① 講師経費 ② 会場・機材使用料 ③ 教材費 ④ スタッフ経費	上限なし

留意事項

【地域講座】

- ・ 補助金は、補助金の交付を予定している講座が2講座終了した後に交付
- ・ 講座の参加者数が、講座の定員数(様式A-2に記載した定員数)の3割未満の場合、補助金の交付額は交付決定額の2分の1
- ・ 講座開催後の補助対象経費の合計(a)が補助予定額の上限(b)を下回る場合は、(a)の額

【学校講座】

- ・ 補助金は、講座終了後に交付
- ・ 講座開催後の補助対象経費の合計(a)が補助予定額の上限(b)を下回る場合は、(a)の額

補助対象は
講座実施団体

■実施状況

学校講座は、2018年度の登録数38講座に対して9校（8講座）で実施されました。2019年度では登録数45講座に対して29校（25講座）で実施されました（表3）。2018年度は、主催団体の構成員が講師を務める場合は補助対象となりませんでしたが、2019年度からは補助対象となりました。また、説明会や交流会の開催などを通して登録・利用を積極的に呼びかけました。こうしたことが功を奏して、登録数及び実施数が伸びています。

表3：学校講座の地区別実施状況（2018年度、2019年度）

年度	区分	計	地区別			
			北信	東信	南信	中信
2018年	登録講座数	38	18	19	15	34
	実施学校数（講座数）	9（8）	3（2）	0（0）	0（0）	6（6）
2019年	登録講座数	45	21	24	17	37
	実施学校数（講座数）	29（25）	4（4）	5（5）	4（4）	16（13）

※1つの講座で複数の地域を対象としているものがあるため、講座の合計値と一致しない。

実施校は小学校が大半を占めています。2019年度になって中学校や高校でも実施されるようになりました（表4）。

表4：学校講座の学校別実施状況（2018年度、2019年度）

年度	区分	計	学校別		
			小学校	中学校	高校
2018年	実施学校数（講座数）	9（8）	8（7）	1（1）	0（0）
2019年	実施学校数（講座数）	29（25）	18（18）	8（4）	3（3）

一方、地域講座は、2018年度に38講座、2019年度は229講座が開催されました。2年目に大きく伸びました（表5）。

表5：地域講座の地区別実施状況（2018年度、2019年度）

年度	計	地区別			
		北信	東信	南信	中信
2018年	138	34	15	10	81
2019年	229	75	38	27	89

※1つの講座で複数の地域を対象としているものがあるため、講座の合計値と一致しない。

登録講座をテーマ別にみると、学校講座と地域講座ともに「自然共生」が多く、自然豊かな長野県の状況を反映しています（表6）。

表6：学校講座と地域講座のテーマ別登録状況（2019年度）

区分	脱炭素	自然共生	水大気	資源循環	暮らし	その他
学校講座	10	31	13	10	12	11
地域講座	53	141	78	38	53	69

※1つの講座で複数のテーマを対象としているものがあるため、講座の合計値と一致しない。

■中信地区環境教育ネットワークによるコーディネート機能

学校講座、地域講座ともに中信地区での件数が多く、学校講座では際立っています。これは、中信地区環境教育ネットワーク（以下「同ネットワーク」という）によるコーディネートにより実施されているものが大半を占めています。

同ネットワークに加盟している活動団体の多くは、学校講座の申請や報告、支払い等の手続きを同ネットワーク事務局に委ねています。また、同ネットワーク事務局は活動団体と学校との事前調整に立ち会ったり、代行したりして、学校での活動団体による講座実施を支援しています。

同ネットワークは、市民・企業・行政の協働により開催された「ゴミ減らし討論会」（第1回2004年～第5回2009年）の実行委員会が母体となって生まれました。ごみ減量には環境教育が大事という認識を深めていた折、松本市教育委員会の担当者より「学校応援団がほしい」と声をかけてもらったことと、同市環境部が環境教育支援事業「トライやるエコ」（市内の小中学校が環境教育を実施する際の外部からの講師料を5,000円補てんする）を立ち上げたことがきっかけとなり、これに呼応した活動を担う組織として、2010（平成22）年に発足しました。

その活動は、ネットワーク活動でつながりのあった活動団体や企業などが、得意なことを学校現場で活かせるように、団体・企業、学校、環境行政を連絡調整しています（図3）。コーディネートという目に見えにくい活動を、商工団体や企業が協賛しているのは、ごみ減らし討論会での信頼関係があったからです。

同ネットワークによるコーディネートは、学校側のニーズに応じて、活動団体や企業をつないで、「つながる学習」を提供していることに大きな特徴があります。ユネスコによるESD（持続可能な開発のための教育）の提起を念頭において、活動団体や企業の得手をつないで、「楽しむ」→「気づく」→「実験・調査」→「力をつける」→「社会参加」へと、「学びのデザイン」に協力しています（資料1）。

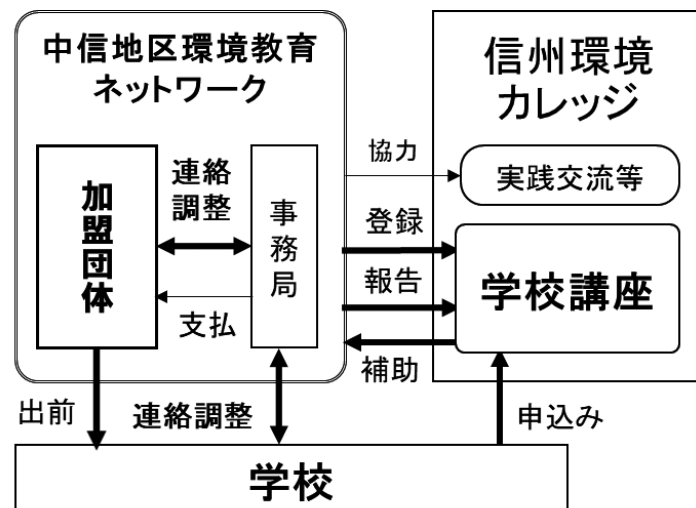


図3：中信地区環境教育ネットワークによるコーディネート概念図

また、活動団体・企業間の学習・交流、ポータルサイトの運営（各活動団体・企業が提供するプログラムの紹介、成果の蓄積、共通書式の提供など）、多面的な活動を行っています。

さらに、「同ネットワークによる学校講座への支援があるから、地域講座を取組む余力が生まれる。学校での実績が地域に出かける上での確信になる。」といった声も聞かれます。

こうした蓄積が、カレッジの仕組みを活かすことにつながりました。

中信地区での取組みからも、たんにWEB上に情報を提供し、資金を補助するだけでは、学校との連携が自動的に進むわけではなく、コーディネート機能が地域にあることが重要であることがわかります。

3. 学校講座の実践例

■実践例を選んだ視点

ここでは、5つの実践例を紹介します。

これらが優良例というわけではありません。コーディネート機能により記録が整っていることで、どんな意図をもって取り組まれたのか、学校の教師と環境団体の方々がどのように連携していたのか、子どもたちにどのような学びの場を提供できたのかなどが伝わってきます。

数多くの実施報告書の中から、SDGs への呼応や長野県の地域特性を踏まえて、里山や河川、生き物などとの関わりから学ぶ、地域の姿から SDGs との関わりを考えるとといった視点から選びました。

そして、「課題解決型」と「地域学習型」の2つのタイプに大別してみました。

■実施報告を読むポイント

実施報告を読むと、これらの講座は、学校側のニーズに寄り添って活動団体が工夫することで、子どもたちに貴重な体験や学びを提供していたことがわかります。また、その背景には、コーディネーターの「透明な接着剤」(58 頁参照)としての役割も理解することができます。

実施報告書の項目建てに注目してください。このように整理して書くと、活動団体と学校が成果や課題を共有し、次の展開に生かすことができます。

以下、実施報告書を読むポイントを例示します。

①「こどもと教師のねがい」

- こどもや教師がどのような思いで外部講師を招いているのかを知ることがすべての第一歩です。

②こんな学習を・・・

- これに対してどんな学びを提供したいと考えたか。そのことを事前に明確にしておくことは、事後の評価にも役立ちます。

③気を付けること

- 外部講師にとって当たり前のことが、子どもたちには初めてのことで、わからないことが多いです。特に安全対策を確認しておくことは重要です。

④当日の様子

- これらの記録がコーディネーターにより書かれていることで、客観的に表現されています。この記録が、学校にとっても、活動団体にとっても、より良い学びをつないでいく

ために重要な情報となります。

- ◎実際の記録は、写真がたくさん使われていますが、ここでは公開用に絞り込んであります。報告書の作成においては、個人情報の扱いは特に慎重が必要です。

⑤子どもたちの感想

- ◎子どもたちの感想は、感想文やアンケート、教師からの伝聞、直接の聞き取りなどから得られます。しかし、率直な感想を引き出すのは意外と難しいものです。講師やコーディネーターが共に活動する中で聞ける感想もあります。

⑥教師の振り返り

- ◎教師は、子どもたちの様子を観察しつつ、外部講師の働きぶりを観察しています。講座を通じて、教師が外部講師の子どもたちとの接し方にどのようなことを感じ、学び、課題として捉えたかを知ることが、プログラムを提供する側にとって次への糧になります。

⑦講師の振り返り

- ◎何に苦心したのかを教師に伝えることは、自分たちの活動だけではなく、教師にとっても他の外部講師を受入れる上での参考となります。

⑧コーディネーター感想

- ◎ここを読むことで全体像がつかめます。コーディネーターの視点を知ることによって企画の改善点なども見えてくるのではないのでしょうか。

表7：紹介事例の概要

テーマ	タイプ	実施校	協力団体
神戸山遊び場 づくり P. 15 ～	課題解決型	A小学校（諏訪市）	寿さと山くらぶ
	全5回にわたってふだん遊んでいる山での遊び方を子どもたちの力で考え、実践していくプロセスに注目してください。外部講師の教師や子どもたちとの関わり方を考える上でも参考になります。		
自然素材で簡単 工作、自然体験 P. 30 ～	力をつける	B小学校（松本市）	NPO 法人わおん♪
	2回（校舎内と校地内）というコンパクトな授業ながら、植え替えとなる校庭の桜の枝や色カードといった小道具を使いながら、子どもたちの五感を引き出し、自然のコミュニケーションを促しています。		
堰の生物 全員集合 P. 35 ～	地域学習型	C小学校（松本市）	NPO 川の自然と文化研究所 （株）環境技術センター
	校区内にある身近な農業用水路に入って見つけた生き物を専門家が何であるかを教えることで、生物多様性を身近に感じています。水質や散乱ゴミの状況といったことにも目を向けるきっかけとなっています。		
リバー アドベンチャー P. 41 ～	力をつける	D小学校（松本市）	リトルピークス
	川の激流徒歩横断体験を通じて、自然の驚異から身を守るために仲間と協力することの大切さを実感しつつ、川の成り立ちや災害時対応などについて学んでいます。講師陣の安全配慮のノウハウがなせる業です。		
SDGs マップ づくり P. 50 ～	地域学習型	D中学校（茅野市）	NPO 地域づくり工房
	SDGs を身近に捉える工夫として、地域を歩き、感じたことを白地図に記録して、その現象と SDGs が示す課題とのつながりを考え、自分たちで行動できることを仲間たちと議論するお手伝いをしています。		

1) 神戸山遊び場作り

学 校 名 A小学校（諏訪市）

講 師 寿さと山くらぶ

学 年 5年2組（28人）

主な活動場所 学校裏山（神戸山）

■第1回 神戸山遊び場作り（9月4日 13:20～14:30）

◇こどもと教師のねがい.....

- ◎子ども達の話聞きながら、林でどんなことができるかアドバイスをいただきたい。
- ◎自然を使った遊具の提示（軽く）
- ◎遊具作りにつながるようなロープワーク

◇こんな学習を.....

鳥居前に集合、始めの会→子ども達と一緒に山に登る。子ども達からは、ふだんどんなふうで山で遊んでいるかを講師に話し、講師からは、安全のことや、こんなこともできるかもねという話を投げかけてもらう。

◇気を付けること.....

話をしながら、安全について注意を向ける。作業時はヘルメットをかぶる。

◇当日の様子.....

【実施概要】

- 自然の中で遊べる遊具の紹介。
- ロープワークを知る。
- 紹介された遊具を体験する。

【実施状況】

- ①学校裏の神戸山にみんなで遊べるようなブランコやターザンロープを作りたいという願いから、講師の鈴木さん（寿さと山くらぶ）に来て頂き、自分たちにできそうな、遊んでみたい遊具を紹介して頂いた。
- ②実際にロープをはって見たらどうなるかな、ターザンロープをつけて見たらどうかなと仮に作って頂いた遊具で遊んでみた。
- ③固定するしぼり方やずれない結び方などロープにはいろんなしぼり方があることを知り、必要感をもてた。
- ④ここは走れるところを残したい、ここにはブランコをつけたい、急ですべりやすいから

ロープをはりたいなど遊んでいく中から見通しや具体的な目標が持てるようになった。

- ⑤次回までに自分たちが作りたいものを試しておこう、いろんな結び方を覚えていこうと見通しを持って終了した。



【子どもたちの感想】

- 作ってほしいと思っていたターザンロープを作ってくれてうれしかった。どんどん遊びに来る人が増えるようにいろんな遊具を作りたい。
- 鈴木さんがたくさんのアイデアを紹介してくれたので、やりたいことがみつかった。次回はぼくらで考えたことを提案できるようにしたい。森で遊び場を作って遊ぶことができ楽しかったので、遊び場を作っていきたい。
- 遊びながらあったらいいなと思うものを考えることができました。私はロープを新しくして、二人乗りのブランコを作りたいと思いました。今日は頑丈なしぼり方を教えてもらえました。直さなきゃいけないところがたくさんあったのでもっと工夫したいです。
- おりにくいところにロープをつけてくれたので、あまりすべらなくなりました。ターザンロープもつくってくれておもしろかったです。キノコも食べられるか教えてくれました。キノコ狩りもできるかなと思いました。ハンモックは緑をみながら寝られて気持ちがよかったです。もっと遊べる山にしていきたいです。

【教師の振り返り】

- 神戸山の林をさらに身近なものにしながら、もっとここを遊べるようにしたい、この木は枯れていて危ないから切った方がいい、と自分事にして関わっていく姿が見られた。
- 紹介して頂いた遊具に目を光らせてつけてみたい、遊んでみたいと積極的に関わる姿が見られ学習への意欲づけができた。
- ロープワークや服装を振り返る中で、みんなが安全に遊び、安全に設置することへの意識ももてた。
- いっしょに関われる時間が短いため短時間に多くのことを教えて頂いた。子どもたちから必要感や気づきをもって専門家に相談するような流れを大事にしつつ、専門家の大事にしている安全管理や技術の価値には気付かせていきたい。

【講師の振り返り】

森の中で子どもたちはとても元気で楽しそう。いつもどのような遊びをしているのかよくわかった。多くの子が、神戸山で遊ぶのが好きであることがわかった。

■第2回：遊具を設置してみる（9月26日 10：40～12：25）

◇こどもと教師の願い.....

前回で鈴木さんからヒントをもらったあと子ども達なりに考えた遊具を林に持ちこんで、設置してみる。上手くいかないことも多いので鈴木さんに助言をもらって、さらにいろいろな子ども達なりの工夫を促してほしい。

◇こんな学習を.....

山に登って、子ども達が考えた遊具を設置してみる。一緒に遊んでみて、具合の悪いところをどう直せばいいか講師のアドバイスをもらいながら工夫する。何か一つ完成するといい。

◇気を付けること.....

作業時はヘルメットをかぶる。

◇当日の様子.....

【実施概要】

- 実施内容（作りたい遊具）の提案
- 実際に提案にしたがって遊具の作成してみる。
- 安全性やロープワークの活用についてアドバイスをもらう。

【実施状況】

- ①前回の学習から自分たちの作りたい遊具について講師に提案し、簡単なアドバイスや考慮すべき点について指摘をいただいた。
- ②ハンモックの目の大きさや縛り方について、コツを教えてもらう。
- ③ターザンロープグループ
 - 調べながらもやい結びをやるが、ロープの長さや木の太さ、本の印刷の向き等でなかなか思ったように縛れない。
 - また縛ったロープに乗るとどんどん緩んでしまうことに気付く。「とてもぶら下がってすべるなんて…」
 - 綱の貼り方についてアドバイスをもらう。やってみたからこそ、ロープワークを練習すること、ロープの長さの妥当性、滑車や塩ビ管などロープを滑らせるものは何がいいか、ロープもクレモナなのか、ビニールロープなのか、など課題点がみえてくる。

④ブランコグループ

○古い遊具を取り外し、講師とともに新しいブランコを設置した。体験しながら「座面が低いかな」「上はどう縛ったのだろう」と確認した。自分たちでも新たに作ってみたいという思いを強くしていた。

⑤やってみることで頭の中に描いていたものと現実のずれが明確になり、必要なこと、やっておかないといけないこと、大きさの感覚のずれなどがはっきりしていた。やるつもりで来たけれどこれ以上活動できない、というグループもあり、遊具一つとっても思ったようにはできないんだなということを感じることができた。

⑥次回（翌週）もハンモックや基本の縛り方について最初に確認することからスタートして、続きをやりながら、ブランコ班やターザンロープ班、ロープ設置班といったできるところから完成を目指すことにして終わりにした。



◇子どもたちの感想

◎いざ行ってみると場所のことやベンチの長さのことくらいしか思い付きませんでした。

鈴木さんに見てもらってもうまくできませんでした。まとめてみると材料は？木材の大きさ厚さは？費用は？と困ったことがたくさん出てきました。次回までに見通しを持ってやりたいです。

◎遊び場を作るとき、ブランコを付けるところが高すぎて、かけるのに時間がかかったし、かかっても引っ張るのが大変でした。それで結局できませんでした。そこでできるだけ低い場所を探しました。いい場所を見つけてくれたので、次回つけてみたいです。作るのが取っても楽しみです。

◎美しい自然がある神戸山にぜひ遊びに来てほしいと思い、それぞれ作りたい遊具を作ることにしました。私は景色を見てほしいと思ったので展望台を作ります。それはとても大変なことで参加している人も3人です。今日もうまくできませんでした。順番が回ってこなかったし、場所を変更したので大変になりました。

◇教師のふりかえり

◎国語で学習した提案書をもとに自分の作りたいものについて思いを語れる姿が見られた。

◎頭の中にあるイメージと実際にやってみた時のうまくいかなさ加減を感じ、準備見通し

の必要性や場面に応じたロープワークの習得に必要性を感じる姿が見られた。

- ◎自分たちのできる範囲（経済的）で安全も管理しながら自分の作りたいものを設置することへの意識をもてた。できることから挑戦し、まず取り組みレベルアップしていこうという段階を踏めるように声がけしていきたい。
- ◎子どもたちから必要感や気づきをもって専門家に相談するような流れを大事にしつつ、専門家の大事にしている安全管理や技術の価値に気付かせていきたい。

■第3回 設置再挑戦（10月2日 10：40～12：25）

◇こどもと教師のねがい.....

みんなで作った遊具を設置しようとしたがうまくいかなかった。思い通り、予想通りに行かなかったところをどう工夫するか、話し合って工夫して再挑戦。

◇こんな学習を.....

前回設置しようとしてロープワークでつまづいたので、教室にてロープワークを再度確認。（もやい結び、エイトノット、二重輪結び）再度神戸山に登って設置の再挑戦。

◇気を付けること.....

作業時はヘルメットをかぶる。

◇当日の様子.....

【実施概要】

- 基本的なロープワークのやり方について指導いただく。
- 実際に提案にしたがって遊具の作成を試みる。

【実施状況】

- ①基本の結び方3つを全体で確認した（8の字結び・もやい結び・二重輪結び）

ハンモックのグループもいるので合わせて編み方を確認し、実際にやってみた。もやい結びは登攀にも使うという丈夫なしぼり方に。「これならきっと使える」と納得。繰り返し練習して山へ向かった。



- ②ターザンロープグループ

「少しだけどすべった。でもやっぱりゆるんじゅう。真ん中まで来るとお尻がついちゃう。高さを工夫しないと。」



③ロープはりグループ

「締め方も分かったから自分たちで一つつけることができた。みんなが使ってくれたし、ありがとうと言ってくれてうれしかった。」

④ブランコグループ。

「一年生でも使えて、あまり低すぎない高さに。自分たちでも縛れるようになったから微調整もできる。2 か所完成したから早く遊びたい。」



※地元新聞にも授業の様子が紹介されました。

【子どもたちの感想】

- 鈴木さんは「救助の時にも役に立つよ」とみんなに言いました。わたしはそれをきいて「すご〜!」と思いました。結び方が分かったおかげでターザンロープっぽくなりました。
- 私は8の字結びはできるけど、時々忘れてしまうので確認できてよかったです。もやい結びはロープ張りなどいろんなところで使うので覚えておきたいです。二重輪結びはブランコに活用できました。
- もやい結びや巻き結びではったロープを、実際に使ってもらおうと「らく〜」「ありがとう」と言ってくれてとてもやりがいを感じました。
- 平均台グループは何を作るか振出しに戻りました。平均台もいいけどちょっと大変そうです。ロープを張ってその上を歩けるのを本で見てそれでも面白いかなと悩んでいます。

【教師の振り返り】

- まだできてはいないけど完成に近づいたという思いがさらにロープワークや工夫をしたり、見直したりしていこうというやる気に変容していて楽しそうに活動している。
- ロープワークを全体で確認できたことで作業へのやる気が高まった。たびたび確認しながら何度もやることが身についていくことにつながるし自信になる。
- ハンモックのグループでは「みんなだと時間がかかるので自分だけでもやりたい」とロープを持ち帰り、「4 時間でできた」と作成して持ってきた。この主体的な姿勢には鈴木さんの温かなアドバイスや実際の現物に触れられるという経験があってこそで、次回にはと意気込んで製作を進めている。

第4回 遊具を設置・完成を目指す（10月15日 10:40～12:25）

◇こどもと教師のねがい.....

鈴木さんからもらったアドバイスを生かしながら子ども達なりに考えた遊具を林に設置してみる。上手くいかないことも多いので鈴木さんに助言をもらって、さらにいろいろ子ども達なりの工夫を促してほしい。

◇こんな学習を.....

山に登って、子ども達が考えた遊具を設置してみる。一緒に遊んでみて、具合の悪いところをどう直せばいいか講師のアドバイスをもらいながら工夫する。ターザンロープチームとハンモックチームを中心に。

◇気を付けること.....

作業時はヘルメットをかぶる。

◇当日の様子.....

【実施概要】

- 提案にしたがって遊具の作成を行いながらアドバイスをいただく。

【実施状況】

①ブランコグループ

「完成したブランコに乗ってみると楽しい。いつまでも遊んでいられそう。2か所もできたから今度はほかのグループを手伝ってみたいな。」

「持ち手のところも握りやすいように、これで緩まないか確認してもらおう。」



②ターザンロープグループ

「ロープは張れたから滑車を自分たちで作ってみた。講師に紹介してもらったけどあんまりすべらないな。」



③ロープはりグループ

「前回一か所だったけれど今回は増設してみた。ロープがあることで普段行かないルートもコースのようになって人が通るようになった。」



④ハンモックグループ

「自分で作ってきたハンモックは教室では大きく見えるが細長く、体を預けられない。もっと広くしないと乗っては遊べない。みんなで作ったものと自分の作ったものをひもでつないで広くしておきたい。」

◇子どもたちの感想

- 音楽会時間割の中でなかなか時間が取れず準備が思うようにできないで当日を迎えてしまった部分もあり、もっとやっておきたかったと振り返る子が多く見られた。
- ブランコグループが完成したことで遊びたい気持ちも遊んでほしい思いも高まっている。
- ロープ張りグループはブランコグループに声をかけさらに人を増やし、安全のためのロープ張りもしたいと崖側の部分にロープをはろうと計画している。
- 滑車をやっぱり試したいとターザンロープグループは次回実験を計画している。
- 平均台グループは木の間に間伐材を縛り付けて、その上にロープを張り伝い歩きできるように考えている。

◇教師の振り返り

- ハンモックのグループ・展望台のグループは休み時間にハンモックを編み続けている。何とか自分たちの思いを形にしたいとそれぞれのグループが活動している様子が分かる。一方で核になって動く子の周りで自分の活動を見つけられずにふらふらしてしまう子も見られる。次回までに自分が作りたいこと、できることを整理しながら残りのグループが何とか何かを実現できるように準備をしておきたい。
- 音楽会が25日に終わるのでその後に第5回を設け、準備をして活動できるように時間を取っておく。
- 特別支援学級の子たちが遊びに行き、ブランコがすごく楽しかった。ブランコや張ってあるロープで遊べるようになるのが楽しみ。と声を掛けられ意欲を高めている。

◇講師のふりかえり

思っていたようには進まないものだ。4回シリーズで終わらせる予定だったが、予定通りにいかない。どう対処するか検討が必要。

■第5回 遊具を設置・遊んでみる（11月20日 13:15～15:00）

◇こどもと教師のねがい.....

鈴木さんからもらったアドバイスを生かしながら子ども達なりに考えた遊具を林に設置してみる。鈴木さんに助言をいただいて、ハンモックを中心に完成させる。子ども達なりの工夫を促し、ロープワークを教えて支えてほしい。

◇こんな学習を.....

山に登って、子ども達が考えた遊具を設置してみる。一緒に遊んでみて、具合の悪いところをどう直せばいいか講師のアドバイスをもらいながら工夫する。ターザンロープチームとハンモックチームを中心に。

◇気を付けること.....

作業時はヘルメットをかぶる。

◇当日の様子.....

【実施概要】

○遊具の設置を行いながらアドバイスをいただく。

【実施状況】

①ハンモックグループ

「木にどう結びつけたらいいのかな。不安定かな。」
「やっと自分たちで編んだハンモックがついた。
包まれているみたいで楽しい。」
「空や紅葉がきれい。右には景色が見えるね。」



②ターザンロープグループ

「滑車を試したけれどロープが太かった。細いロープを張りなおしたら滑った。鈴木さんに番線の締め方でロープを張ってもらったらすべりやすくなった。」



③平均台グループ

「誰かが立っても安全のようにしっかり固定しよう。木が傷つかないように。もって支えられるようにハンモックの網を木にはろう。」



④安全面への気づき、自然環境や景観への配慮

ロープ張りグループほか

「ガムテープやいろんなところに張り巡らしたロープ・ひもは紅葉や景観を邪魔していないかな。」
「ロープやひもの耐久性は大丈夫かな。」



◇子どもたちの感想

- ハンモックグループは苦心してきたハンモックを張ることができ達成感を味わっていた。ハンモックで見上げた景色に紅葉や空のコントラストを味わっていた。ロープの結び方や固定の仕方がまだ不安定で自分で調節でききれないので身につけたい。
- 展望台グループは滑車にこだわりを持ちながらも、ハンモックを完成させている。それを高所につけていきたいと願っているが間に合わなかった。こだわりは持ちながらも完成への手順を見通しながらやり遂げたという区切りをみつけてほしい。
- ターザンロープは一応の完成をみせたことで子どもの気持ちは高まっている。完成を区切りにはするも、もう少し調整したいと考えている。ロープをぴんと張る方法を考えてきたり、滑車を持ち込んできてくれたりしたことを感謝している。
- 平均台グループは木の間に間伐材を縛り付けて立って歩けるようにできた。もっと広げたいし、その上にロープを張り伝い歩きできるようにハンモックを付けようと思っている。

◇教師の振り返り

- 全5回の鈴木さんによる講習が一区切りになった。全てが完成したわけではないが森に生きる知恵や工夫、専門家が大事にしていることにふれ、その価値を体感することができた。完成したグループも未完成のグループもやりたいことを見つけながら山を楽しんでいる。地域の里山で遊ぶ経験を手伝っていただいてありがたかった。
- 12月になると霜が降り山に入りにくくなるので、11月中に何回か機会を作り、未完成でも子どもたちなりの区切りがつけられるようにしたい。

◎また遊具ということで安全性や景観も改めて考え、最後に安全安心に立ち返って今後を見通したい。

◇講師の振り返り

1人ではやりきれない部分があった申し訳ない。展望台グループが途中になってしまったので、何とか子どもの気持ちに区切りがつくようにもう一度来たいと思う。

■第6回（おまけの1回）遊具の完成・遊具で遊ぶ（11月26日10：40～12：30）

◇実施の経緯.....

5回の学習で終了の予定だったが、やりきれなかった班もあった。鈴木さんの好意で最後にもう一回、仕上げの学習をすることになった。

◇当日の様子.....

【実施概要】

○遊具の設置を行いながらアドバイスをいただく。

【実施状況】

①平均台グループ

「注意書きを作ったよ。2人以上は危ないかな。網を張ったら手をかけやすくなった。」
「時間があったからハンモックやつりブランコも完成させたよ。」



②ターザンロープグループ

「滑車を変えたらとってもよく滑る。のり場所は提案してくれた間伐材のはしごをロープで作ったよ。左右2か所のターザンロープができたよ。交互にやってもらわないとぶつかっちゃうね。」

6回目にととう全部の遊具が完成した。まだ100%ではないし、今後も安全面や注意書きなどの管理をしていく責任について鈴木さんにお話をいただいた。子どもたちなりの達成感と共によりやく遊べる段階になった「森の遊び場」に子どもたちのワクワク感が高まっている。

翌日、姉妹ペアの3年生とペア活動で遊び、モニタリングを行った。





- 近くの神戸山がこんなたくさんの遊び場になってうれしい。もっと遊びに行きたい。
- 安全面への気づき（自然環境や景観への配慮ロープ張りグループほか）
「ガムテープやいろんなところに張り巡らしたロープ・ひもは紅葉や景観を邪魔していないかな。」
「ロープやひもの耐久性は大丈夫かな。」



◇子どもたちの感想

- ◎ハンモックグループはロープの結び方や固定の仕方を工夫し、安定感のあるハンモックに仕上がった。乗ると狭くなってしまう感じがなくなり心地よくできた。
- ◎展望台グループは、手作りはしごで登れるハンモックを完成させた。こだわってきた滑車の利用はまた研究をして、機会があれば実施してみたい。
- ◎遊具の完成を心から喜び楽しめた。準備の大切さや、今後も安全管理をしていく管理責任について学んでいる様子が見られた。

◇教師の振り返り

- ◎プラス1の時間だったが、講師の鈴木さんのアイデアによりすべての遊具が完成にたどり着いた。達成感が味わえたこと、遊具で遊んでもらえたこと、ものづくりする楽しさと責任や義務について考えることができたいい学習になった。
- ◎他学年からも遊びに行きたいという声があり、もう少し早い完成だとよかったが、暑い時期から寒いこの時期まで森林をしっかりと味わうことができた。

◇講師の振り返り

- ◎なんとか子ども達が納得できる場所にたどり着くことができてほっとした。子ども達がとても元気で、楽しく活動ができた。

■「神戸山遊び場作り」全体を振り返って

◇教師の振り返り

広げ過ぎた感があるので、もう少し絞るか、又は月に1回ぐらいの割合で春先から時間をかけて取り組めば良かったとの思いはある。年間を通して神戸山をテーマにすることで、木や山に意識が生まれたのは良かったと思う。

◇講師の振り返り

ふだん遊んでる山を、もっと楽しく遊ぶにはどうしたいかということ子ども達なりに一生けんめい考え、それを実現させるお手伝いをした。こちらが「こうだよ」という前に「こういうことをやりたい」というのを子ども達の方で持っていたので、それを実現させるために、基本的なロープの結び方を教えたり、あらたな見方から提案をしたりということでお手伝いをした。

子ども達の想像力と実行力が見えた活動で、考えることもすごいが、それを達成させるための努力もすごい。何より、元気が良くて、山を駆け回っていた。なかなか手が回らないところもあったが、教えれば覚えも早くて、それもすごいなと思った。

最後に子ども達に考えてほしいところは、どんなところに危ないところがあるか、遊びながら考えてほしい、どんなところに危険があるかということを考えることができて（危機管理ができて）、完成だと思う。

◇コーディネーター感想

《9月4日①》

森の中でどのような遊びをしたいか、遊具がほしいかとの問いかけに対して、何人もの生徒が積極的に次々と発言していたのが良かった。

友だち同士で遊び方や、体の使い方をアドバイスしたり、講師の鈴木さんから学ぼうという姿勢が感じられた。

斜面での転倒や、ロープからの落下により怪我をする可能性があり、その場合の対応をどうするか明確にし、教師・講師・記録者が共有しておく必要があると感じた。

《10月15日④》

学習プログラムとしてやや欲張りすぎてしまったのかもしれない。

いくつものグループに分かれての取り組みとなるので、全てのグループに対して講師である鈴木さんの指導が行き渡らず、特定のグループのみに対応せざるを得ない状況ができてしまっていた。

《全体を通して》

子ども達の発想や、試行錯誤の展開に寄り添いながら、目的達成に向けて支援をするということの難しさと、面白さが見えた活動でした。

子ども達の発想について行くためには講師側の幅広い技能が求められて鈴木さんの懐の深さを感じました。一方で、子どもたちは自分達がやりたいことなので、一生懸命考えるし、動くし、覚えも早い。工夫したり、やりなおしたり、発想を変えたりという過程は人生のあらゆる場面でついて回ることなので、試行錯誤の結果何かを達成できたという体験は子ども達にとって今後に生きる学習だと感じました。

支援団体としては、鈴木さんがせめてもう一人いれば状況は今少し楽だったかなというところで、講師探しの必要性を感じました。

2) 自然素材で簡単工作、自然体験

学 校 名	B 小学校（松本市）	講 師	NPO 法人 わおん♪
学 年	2 学年 3 クラス（100 人）	主な活動場所	各教室

■第 1 回 自然素材で簡単工作（9 月 18 日 8:50～11:35 各教室にて）

◇子どもと教師のねがい.....

- ◎50 周年で伐採した桜の木を活用しての工作。
- ◎工作の工夫を支援してほしい。道具の使い方を教えてほしい。
- ◎木に触れる良さを伝えてほしい。

◇こんな学習を.....

- ◎桜の木（50 周年で伐採）の説明
- ◎木の輪切りを紙やすりでやする。手触りの体験
- ◎絵を描き、ヒモをつける

◇気を付けること.....

- ◎紙やすりの使い方

◇当日の様子.....

【実施概要】

50 年前創立当時に植えられた校庭の桜の木が、50 周年を期に植え替えとなり、そのときに伐採された枝（自然素材）を利用して、キーホルダー作りを行った。

【実施状況】

はじめに、講師の山田さんより内容の説明をしていただきました。

「50 歳の桜の木を、紙やすりを使ってきれいに磨くよ。」

聞いただけでは、イメージはわからないはずだからと早速輪切りを配り、「裏と表で触った感じが違うから確かめて。」五感を磨くことの大切さを伝えられました。

「ほんとだ、ぜんぜんちがう。」「すべすべだ。」

手順を端的に説明していただき、紙やすりが配られると、夢中で磨き始めた子どもたちでした。



つるつるになるまで、磨き上げる子どもたちに、山田さんが「いいねえ。」「すごいね。」と声かけをされ、益々熱心に磨こうとする子どもたちでした。

「磨いていくと、木の香りが強くなるよ。」と山田さんが話されると、木の香りをかぎ、「ほんとだ。いいにおい。」「木のにおいがする。」と、さらに磨き上げようとする子どもたちでした。

最後に紐を通して出来上がりです。この紐を結ぶというのも、細かい作業なため、2年生には大変に感じる子も少なくありません。それでもブンブンゴマで紐を結んだ経験を生かしながらこちらも丁寧に仕上げました。

仕上がりで大満足で、講師の方と記念写真を最後に撮りました。早速、大事そうに持ち帰って行った子どもたちです。

◇子どもたちの感想

- ◎紙やすりでみがくと、こんなにつるつるになるんだ。
- ◎紙やすりでみがくの面白い。
- ◎桜の木だから、記念にさくら描こう。
- ◎学校の桜なので、記念に学校のマーク（校章）描こう。
- ◎令和元年に作ったから、令和って描こう。
- ◎いい記念になった。
- ◎磨くのは大変だったけど、簡単にできたから楽しかった。

◇教師の振り返り

- ◎学校の桜の枝という身近な自然素材を、輪切りに加工し、2年生の子どもたちでも簡単に工作の楽しさを味わえるように、2種類の紙やすりを準備していただけてありがたかったです。
- ◎ポスカや紐の準備も含め、手順もシンプルに1時間の授業の中で展開していただき、短い時間の中で十分楽しみながら学習することが出来ました。
- ◎丁寧に桜の木の輪切りや穴あけ、彩色用のポスカや紐などもご準備いただき、どのクラスも集中して学習に取り組めました。
- ◎身近な素材を活用しているため、興味も広がっていたこと、2種類の紙やすりで丁寧に磨いていくことで、手触りがどんどん変わっていくことを実感したり、木の香りを感じたりと自然の良さを工作活動を通して体感できるプログラムでした。

◇講師の振り返り

みんな元気でどんどん取り組んでくれて良かった。紙でやするというとても簡単な工作でしたが、「楽しい」と感じてもらえることができたようでうれしい。工作の好きな子ども達のようなので、学年が上がるにつれてどんどん難しいものに取り組んでくれるといいなと思います。

◇コーディネーターから.....

わずか 45 分の間に、木に触れ、やすり、絵を描き、作品を仕上げるという一連の作業がスムーズに行われました。子どもたちが元気でお互いに声をかけあって助け合っていたこともありましたが、講師のほうも、声かけのタイミング、材料、資材の準備など万端で、さすが慣れていました。

■第2回 自然体感プログラム（10月28日 8:50～11:35 校地内）

◇こどもと教師の願い.....

- 匂いを嗅ぐなど感覚を養う。
- ネイチャーゲームなどを使って五感を鍛え、使っていけるようにする。

◇こんな学習を.....

- ネイチャーゲームなどを使い、五感を使って自然を感じる。

◇気を付けること.....

ハチの巣、ハチ対策

◇当日の様子.....

【実施概要】

- ①自然の中で同じ色を探そう。
- ②万華鏡づくり

【実施状況】

①自然の中で同じ色を探そう

はじめに、講師の山田さんより、色カードが配布され、「周りで同じ色を見つけてごらん。」と投げかけてもらいました。

「あの木（ヒマラヤスギ）の色は？」「緑」

「でも、全部同じ？」「黄緑もある。」そこで、色カードの確認です。

「これは？」「緑」

「じゃあ、こっちは？」「黄緑」

「同じ色あるかな。」夢中で葉っぱや石など見つけました。

「黄土色もありそう。」「ネコジャラシが同じだ。」

「青がない・・・」

遊具の色とも違う伝統色の青だけに、南庭になかなかなく、困っていると、「見回してご覧」と山田さんよりアドバイス。ぐるりと見回して「空」「あ、山の色」「いいねえ。」と遠くにも同じ色を見つけました。

②万華鏡づくり

色の関心が高まったところで、山田さんから「この集めた葉っぱとかで万華鏡を作ろう」と提案されると、ワクワク感がさらにアップでした。ペアにキットが配布され、早速、レンズの中に入れていく子どもたち。「うわあ、きれい」

「見てみて！」と葉っぱをちぎって出来上がると、次々に山田さんや担任のところへ見せに来ました。



簡単に出来る万華鏡の仕上がりに大満足で、キットが百円ショップで購入できることを講師の方から聞くと、「うちで買ってもらおう！」とやる気いっぱいでした。

◇子どもたちの感想

- ◎身近なところにある葉っぱもよく見ると同じ葉っぱの中でも色が違う。
- ◎すぐ見つかる色となかなか見つからない色もある。
- ◎他の場所でも色を探してみたい。
- ◎葉っぱや石や実も万華鏡に入れるとすごくきれいになる。
- ◎自分で作ってみたいくなった。
- ◎作った万華鏡もって帰りたいかった。
- ◎簡単に出来るから百円ショップでキットを買って作りたい。

◇教師の振り返り

- ◎庭にある身近な自然素材である葉っぱや実、石などを、見て、触って、見比べてと体感を通して触れていくことで、「よく見なさい」とあえて言わなくてもジーっと夢中で探し、見るようになる子どもたちの姿に、自然体感プログラムの良さを感じました。
- ◎配色カードも見やすく使いやすいサイズにラミネートされていて、低学年の子も簡単に扱うことが出来、教材の作り方も参考になりました。
- ◎配色カードも万華鏡もペアで一つというのも、それはそれで自然とコミュニケーションを働かせられ、良かったと感じました。
- ◎日ごろ遊びや学習の場として馴染みのある庭であったが、視点を変えると見方考え方も広がるということを学ぶことが出来ました。1時間があつという間な中にも夢中になった良いプログラムでした。

◇講師の振り返り

- ◎みんな元気でよかった。時間がたりなかったが、意欲的に取り組んでもらえた。
- ◎チャレンジしよう、やってみたいという気持ちが出てくるとハードルは下がる。
- ◎協力して一つの作業をすることで、普段とは違ったつながりや思いやりを引き出すというのもプログラムの狙いの一つ。
- ◎うまくいったのではと思います。

◇コーディネーターから

色探し、万華鏡の材料探しで、子どもたちは、ふだんあまり観察することは無いだろう場所、中庭の隅々まで目を凝らして動き回っていて、自然観察の手法として、なかなか優れた物のプログラムだと思いました。

合図の「ぶ～」という音や、万華鏡、色台紙などの小物に子ども達の気持ちを引きつける小ワザが効いていて、わおんさんらしく、楽しい活動になっていました。

3) 堰の生物全員集合

学 校 名 C小学校 (松本市)

講 師

NPO川の自然と文化研究所
株式会社環境技術センター

学 年 3学年 (118人)

主な活動場所

校区内の農業用水路

日 時: 9月3日 8:15 ~ 11:45

◇子どもと教師のねがい.....

生き物の扱い方、観察の仕方、生き物の生きる知恵 について教えてほしい。

◇こんな学習を.....

校区内にある2つの堰を調査対象として、それぞれの堰に先発と後発グループで観察した。

1 グループ目 (3組・4組)

8:15 学校発 ~ 8:35 堰にそれぞれ到着

8:45 ~ 採集 ~ 9:30 9:30 ~ 観察 ~ 9:50

10:00 堰出発 ~ 10:20 学校着

2 グループ目 (2組・1組)

9:40 学校発 ~ 10:00 堰にそれぞれ到着

10:20 ~ 採集 ~ 10:55 10:55 ~ 観察 ~ 11:15

11:25 川発 ~ 11:45 学校着

◇児童の服装.....

水着の上にTシャツ、濡れてもよい運動靴、帽子、水筒

◇気を付けること.....

●公民館に周辺民家への配慮を依頼

●蚊がいる

◇当日の様子.....

【実施概要】

○堰で見られる生き物について、自分たちで採集したり、講師の方が採集したりしたものについて、その生き物について講師の方に聞いたり観察したりしながら、活動した。

○ふり返りの活動では、車屋・崖下堰で見られた生き物について、自分たちの感じたことを踏まえながら、自分たちの図鑑を作ること、より学びを深めた。

①車屋堰

〈3年3組〉

以前の総合的な学習の授業で車屋堰の存在を知っていた3年3組の子どもたち。どんな生き物がいるのか、以前から知りたがっていたので車屋堰での生き物探しにとっても意欲的だった。

初めは、車屋堰の細い支流で生き物探しを始めた。初めはヨコエビをたくさん採ることができた。

活動をしていくうちに、川の底や側面の草が生えている所に生き物がいることに気がつき、探し始めた。ヨコエビ以外にも、トビゲラの幼虫やヤゴにトノサマガエル。ヒルやブヨの幼虫。珍しい生き物だと、スナヤツメも見つけることができた。蛙を食べている昆虫も見つかり、身近な環境での食物連鎖を目の当たりにすることもできた。

学習の最後に講師の先生に、捕まえた生き物について説明をしていただいた。子どもたちが見たことのない、スナヤツメなど詳しく説明していただけたので、新鮮な驚きがあった。学校に戻り、見つけた生き物について絵と文章でまとめたが、講師の先生方に教えていただいたことを書いた子どもがたくさんいた。

子どもたちの感想の中に「車屋堰があることは知っていたし、見たこともあったけど、こんなにたくさんの生き物がいることに驚いた。」というものがあつた。普段近すぎて見逃しがちな場所にも、たくさんの生き物が住んでいることに気がつけた活動になった。

学習の後、子どもたちともっと調べてみたいことや解決しなくてはいけない課題がないか話し合った。「次は1組さんが調べていた崖下堰でも生き物を捕まえて、車屋堰と比べてみたい。」という声がたくさん上がった。機会があれば、崖下堰での活動を計画したい。



〈3年2組〉

最初は堰の土手から活動を始めた。各自、網とバットを手にし、すくっていった。最初はヨコエビがたくさんとれていた。だんだんと、「ほかの生き物もつとめないかな」と徐々に活動場所を広げていった。

慣れてきたので、いよいよ深さのある堰のほうへ移動後、入ってみた。「ドジョウが取れたよ」「カキドジョウだって！大きくてすごいやつだよ！見て」自分たちの採った生き物を講師の方や担任に嬉しそうに見せたり、名前を聞きにいったりはバットに移したりと、意欲的に採集活動に取り組んだ。

メダカを採ったらしく、「よくメダカを採ったね」

「これはどう見てもメダカだな」と驚く講師の方々を見て、「珍しいの、とっちゃった」と、嬉しそうにニコニコしていた。しばらく眺めたり講師の方にいろいろ聞いたりしていた。

採集後は、採ってきた生き物を並べて、講師の方に聞いたり質問をしたりする時間をとった。自分たちの採った生き物に興味津々らしく、自分たちからたくさん質問をし、難しい名前も何度も聞きながら覚えようとしていた。その後「きれいな所にしか住めないから」という講師の方々の言葉に納得し、「またね」「さようなら」と声を掛けながら、やさしく堰へ戻してあげることができていた。

活動のまとめとして自分たちが見たり触ったり、聞いたりしたことを残しておきたい、という気持ちと、もう少し調べておきたいという気持ちがあったので、クラスでもう少し調べて、オリジナルの図鑑を作りしばらく掲示することにした。さらに他の堰も調べて図鑑にして、校内にも飾ってみたいという願いが出てきている。



車屋堰の振り返り

◇子どもたちの感想

- ◎どの子も大喜びで水の中に入り、時間いっぱい生き物採集を楽しんでいた。
- ◎知らない生き物がいっぱいいたけど、おもしろい動きをするものとか、珍しい生き物とかも採れて、嬉しかった。
- ◎時間が短かった、もっとやりたかった。
- ◎専門の先生に教えてもらってすごく勉強になったし嬉しかった。
- ◎普段消極的な子が、自分から進んで講師の方に聞きにいったり、抵抗を示していた子たちが自分から水の中に入っていたりと、活動に夢中になっている姿が見られた。

◇教師の振り返り

- ◎子どもたちにとっても職員にとっても、とても楽しく活動でき大変ありがたかった。子どもたちはまた自分たちの見ていないほうの堰にも行って、いろいろな生き物について詳しく知りたいという願いを持っている。
- ◎可能ならばまた講師の方々にお願いして、今回のような活動をしたいところだが、予算的な関係で2度、3度ということができないのが残念に思う。また、機会があったら計画したい。

◇講師の振り返り

- ◎生徒が水路に入り、水に親しみながら興味を持って生物の観察ができた。
- ◎また、こんな近くの川に、ドジョウやヤツメウナギなど最近ではあまり見ない生物を含め、何種類もの生物がいることを実感できたのではないかな。

◇コーディネーターから

- ◎この地区には、湧水を主な水源とする車屋堰と呼ばれる水路があり、地元地区で定期的に整備を行っている。比較的自然のまま残っている水路であるため、様々な生物が生息している。
- ◎中心市街地に近く、住宅化も進んでいるため、学校の近くにこのような自然の状態に近い水路があり、なおかつ最近あまり見なくなった生物がいることは驚きであり、子どもたちにも身近な自然を感じるいい機会だったと思われます。 青

②崖下堰

〈3年4組〉

○講師の先生方に、堰の入り方や生き物の捕まえ方を教えていただいた。

堰に入ることに抵抗があった児童も、講師の方に実際に生き物の捕まえ方を丁寧に教えていただくことで、「自分もやりたい」「楽しそう」と期待を持つことができた。入るポイントは最初グループごとに分けたが、活動が進むにつれ、自分が探したい場所に移動する姿が見られた。

○崖下堰で、生き物を夢中で探す子ども達。

最初は「なかなか見つからない」と嘆いていた子達も、友だちが見つける姿や講師の先生方にコツを教えていただくことで、様々な生き物を見つけることができた。また多くの種類を見つけることに重点をおいて、見つけた生き物を「これは何だ!」と驚く様子も見られた。



○捕まえた生き物を友だちと見せ合う。

生き物を捕まえることに夢中になっていた子ども達も少しずつ、周りの友だちが何を捕まえたのか気になり始めた。友だちが捕まえた生き物に驚いたり、自分の捕まえた生き物を自慢したりと、友だちと生き物を捕まえた喜びを共有する姿が多く見られた。

○観察会

講師の先生から捕まえた生き物について教わった。聞いたこともない名前や特徴に多くのことを学ぶことができた。最後は、多くのことを学ばせてくれた生き物を放し、自然に感謝することができた。



〈3年1組〉

崖下堰について川をのぞくと澄んだ水が子どもたちの目を引いた。「きれい。」と感激しながらも「生き物なんて見えないよ。」と不安そうな声。また、川の流れるスピードがあったことから、水に入るときにとっても慎重になっていた。

さて、水の冷たさにも慣れてくると生き物の採集を楽しむ姿が増えてきた。網を一度すくうと、見たことのない生き物が動いている。「なにこれ？」と川の中に戻してもう一度すくってみる。「なんにもとれないよー。」という網の中には小さな生き物がいるのだが、子どもたちの生き物のイメージとはちがうのか、あまり興味を示していない。

そのうちに「これ、えびみたい。」と気付く子が出てきた。すると、他の子も「私もえびとれた!」「ぼくも!」とヨコエビが採れることに喜びを感じるようになった。ある子は網の中によろよろした生き物が入っていた。「うわっ、気持ち悪い。」と言う子もいれば「ぼく、さわれるよ。」とつまんでバケツに入れている子もいた。



この「によろによろ」が採れる度に辺りは大騒ぎになり、これは一体何なのだろうという疑問が出てきた。講師の先生に聞くと「ヒゲナガカワトビケラ」だと教えてもらい、一気に「生き物」として位置づけられることとなった。その後、ドジョウやカジカなど、多くの生き物も含めて夢中になって採集していた。採集後、講師の先生から、仲間別に説明していただくと、形やその動きのおもしろさにも気付くことができた。

学校に帰ってから、分かったことや思ったことをたくさん書いた子どもたち。新しく知った生き物についてさらに調べてみたいという気持ちを持った。さらに、参観日にも保護者の方に向けて発見したことを写真や絵を用いて説明していた。川に入ることや生き物を採ることについてあまり経験のない子どもたちもいたが、自然と関わる貴重な機会となった。



崖下堰の振り返り

◇子どもたちの感想

「だれかにこの魚はあそこにいたよとか教え合いたい」「いろいろとれたけど、もう少し種類のちがうものをとりたかった。」「つめ たかったけど、いろいろな生き物がつかまえられた」など、多くの感想があった。また「もっと生き物について調べてみたい」など、これからの活動につながる感想も多くあった。

◇教師の振り返り

◎地域の方や、講師の方に地元にある自然資源についてお話をいただいたことが有難かった。また、体験を通して、今まで川遊びをしたことがない子や抵抗があった子も夢中で取り組む姿が多く見られた。

◎授業参観日で、堰での体験をグループでまとめ、保護者にも知ってもらうことができた。

◇講師の振り返り

◎始めはおっかなびっくりの子ども達だったが、段々なれてきて水や生物に親しんでくれてよかった。元気でいきいき活動できた。

◎沢山の種類を見つけていくことで、水生の生き物に興味をもつきっかけになってくれると嬉しい。

◎夢中で学習することがなにより大事だと思う。

◎小さいころから地域の自然に触れる機会をたくさんつくれるといい。

○身の周りの水がどのようなになっているのか、水の循環学習につながればと思う。

◇コーディネーターから

◎湧き水で水質もきれいで地域の特性がうかがえた。反面、水かさがやや多く流れもあり、冷たさも手伝ってか、水に入らないで川岸からあみを入れて生物をとっている子ども達の姿も見受けた。○今まで川の生物学習をしてきたとあって、子ども達の取り方は上手である。

◎石を上げる子、あみをおく子など、1人ではなく2人で組んで行動する姿もあり、工夫する面が見受けた。

◎大きなゴミをひろって先生に届ける子もいる。「ゴミをなくしたいね」と対応する先生の姿もあり・・・環境教育の具体はどこにもあると感じた。

◎生物に直接触れることができない子どももいて、経験を重ねることが大事だと思う。

4) リバーアドベンチャー

学 校 名	D小学校（松本市）	講 師	リトルピークス
学 年	5 学年 5 クラス（155 人）	主な活動場所	校内及び梓川

■第1回 事前学習（8月27日 13:45～14:30 学校多目的室）

◇子どもと教師のねがい.....

- ◎梓川の源流からの話を聞きたい。
- ◎梓川の成り立ちについて。
- ◎川探検本番に向けて注意すること等。

◇こんな学習を.....

- ◎大河の一滴スライドショー、質疑応答

◇当日のようす.....

【実施概要】

- 「大河の一滴」についての講義
- 梓川の旅（65km）についてスライドショーを見ながら学ぶ。
- 自水の行方について学ぶ。



【実施状況】

- 5-1 水の大切さを考えることで、地球環境について考えた。
- 5-2 梓川の源流や、人工物の方が危険であることを教えていただいた。また、体験する内容や気を付けることを聞いた。
- 5-3 梓川の始まり、用水や護岸工事をされた川と自然にできた地形の残る河との違い。体験プログラムの紹介と注意。
- 5-4 梓川の源流や、人工物の方が危険であることを教えていただいた。また、体験する内容や気を付けることを聞いた。
- 5-5 普段何気なく見ている梓川について、実感を伴って考えることができた。

■第2回 川探検（9月4日、5日 川にて）

◇子どもと教師の願い.....

- ◎川の水が流れるとどうなるか、川の流れ、川の仕組みについて知りたい。
- ◎水中の生物についても知りたい。

◇こんな学習を.....

- ◎川のレスキュートレーニング、川遊び、水生昆虫探し
 - 1 グループ目 8:30 発（徒歩）～ 9:00 川着 9:10 ～活動～ 10:30 終了
 - 2 グループ目 10:00 発～ 10:30 川着 10:40 ～活動～ 12:00 終了
 - 3 グループ目 13:00 発～ 13:30 着 13:40 ～活動～ 14:45 終了
- クラス毎、2日間にわたり実施する。

◇気を付けること.....

- ガイドの注意を守る。水量、天候判断
- ◎子どもの服装
- 水着、化学繊維のシャツ、濡れてもよい運動靴、靴下
- ◎講師側で準備する装備
- ウェットスーツ、ヘルメット、網、バット、ブルーシート、レスキューツール
- ◎学校側で準備する装備
- 虫かご（1個）、水筒、救急バック、ライフジャケット（市教委）

5-1

◇当日の様子.....

【実施概要】

- 梓川での体験（ディフェンシブスイム、川の歩き方、アグレッシブスイム）

【実施状況】

- ①川に実際に入る前の注意事項の指導を受ける。
- ②ディフェンシブスイム（川での流され方）
- 手足を上げラッコのような形になる。
- 頭は上流を向くようになるように動かすが、バタバタと動かさない。
- 足がつくところで静かに歩きながら立つ。



③川の歩き方

- 3～4人が縦になってしっかりと支えあいながら横になり上流のほうに歩く。
- 先頭の方は、水圧を直接受けるので力のある人が良い。後ろの方は前の人を押しすぎずしっかりと支えることが大事である。



④おぼれている人の助け方

- ロープを、声をかけながら近くに投げる。

⑤アグレッシブスイム川遊び

- 石の上から少し深いところへ飛び込む体験をする。
- 飛び込んだ後は、岸までクロールで泳ぐ。



◇子どもたちの感想

- 川に入ることを、はじめは怖いと思っていたが、正しい方法を教えてもらったらだんだん楽しくなってきた。またやりたい。
- 川の流れが結構強いことを初めて知ったので、これからは気を付けて川に入りたい。
- 水が冷たくて始めのうちは騒いでいたが、終わりのころには「もっともっと。」とほとんどの児童が口にするほどだった。

◇教師の振り返り

- 普段は川に入ることができないので、実際に川の水圧を体験したり、安全な川での過ごし方を学べたりしたことは、今後の人生の中でよい経験になったと思う。
- 環境教育だけでなく、指導員の方の体験話を聞くこともできたので、キャリア教育にもなったので良かった。

5-2

◇当日の様子.....

【実施概要】

- 梓川での体験（ディフェンシブスイム、川の歩き方、アグレッシブスイム）

【実施状況】

①体験の準備

安全に楽しむために、ウェットスーツとライフジャケットを着用した。初めて着用する子がほとんどで、着ることに苦戦していた。着用の動きにくさなども感じながら、川まで移動した。



②ディフェンシブスイムと川の歩き方の体験

まず、足を上げて川下を向くことや、ライフジャケットに体重を預けて浮かぶことを教えていただいた。次に、グループに分かれて、縦列で横向きに進む体験をした。一人あたりにかかる水圧の負担を少なく移動することができることを身をもって体験できた。



③川への飛び込み、アグレッシブスイム

川に飛び込んでから岸まで泳ぐ体験をした。その後、ディフェンシブスイムで流れ、途中で方向を変えてからアグレッシブスイムに切り替えて泳ぐ練習をした。



◇子どもたちの感想

- 初めて川に入ってみると、水がとても冷たかったけど、やっていくとどんどん楽しくなった。
- ラッコ泳ぎが最初緊張したけど、問題なくできた。
- 思っていたよりも流れがはやくて驚いた。またやりたい。

◇教師の振り返り

- 専門の道具を使い、専門の方に教えていただいたことで、楽しみながらも真剣に学び、体験する子どもたちの姿が印象的だった。
- 子どもたちにとって、とても身近な梓川の新たな一面を知り、より自分たちの地域への理解が深まったように感じる。日記やふりかえりカードにもその気づきをたくさん書いていた。

5-3

◇当日の様子.....

【実施概要】

○梓川での体験（ディフェンシブスイム、川の歩き方、アグレッシブスイム）

【実施状況】

①川下り体験

顔や体の正面は川下に向かう、足を上げるなど、川を下る上での留意点を意識して、川を下る体験をした。



②川渡り体験

チームを組み、川の流れに平行に縦列で横向きに進むことにより、一人あたりの負担を少なく移動することができることを体験した。



③川下りから方向を変えて移動する体験

川を下る体験から、向きを変えて、斜め45°上流に向かって泳ぐことにより、川を横断することができることを体験した

◇子どもたちの感想

- 一人ずつ流されていくのは、最初は心配だったけど、実際にやってみると楽しかった。
- 外からゆるやかに見えるところでも、入ってみると自分で立つのがやっとだったが、流されたり飛び込んだりするの楽しかった。

◇教師の振り返り

- 外部の方に教えてもらい、子ども達にとっていつもと違う気持ちの引き締めを感じた。
- はじめてのことがらに不安感が大きく、なかなか取り組めない姿のある児童が、外部講師や周りの子どもたちの励ましによって、他の児童と同じプログラムを体験でき、本人も嬉しそうな表情を見せた。翌日も心情の表れた日記を書いていることができた。

5-4

◇当日の様子.....

【実施概要】

○梓川での体験（ディフェンシブスイム、川の歩き方、アグレッシブスイム）

【実施状況】

①体験の準備

ウェットスーツとライフジャケット、ヘルメットを着用し、安全に川で楽しむための、注意事項などを聞いた。



②川下り体験

○手足を上げラッコのような形になり、流される体験をした。

○身体の向きが変わってしまっても川下に身体を向けるよう助言された。回転しかけている子もいたが、手でバランスをとって川下を向くよう意識することができていた。



③川渡り体験

4人1組になって一列で川を渡る体験をした。川の流れに平行に足並みを揃えて進むことで負担を少なくすることを学んだ。

1番前の人が最も抵抗を受けるということで、自信のある子が前に来ていた。



④川で流されてしまった際の泳ぎ方体験

川でおぼれた際に上流に向かって泳ぐと助かる確率が低いということで、助ける人は下流に走り、流された人は下流側の岸の方へ泳ぐという体験をした。

川へ飛び込む川遊びも体験することができた。



◇子どもたちの感想

- 川に流される体験をして、流されるのにもコツがあるなんて思わなかったです。やってみただ、思っていたよりもとても難しかったです。飛びこみをしたときは、思っていたよりも深くてびっくりしました。さらに泳いでも泳いでも全然向こうに行かなくて川の流れは強いなあと思いました。とっても冷たくておどろきました。
- このように身をもって、川の危険さを体験することができ、川で遊ぶ際には、ライフジャケットなどを着用し、安全に遊びたいという感想がとても多かったです。

◇教師の振り返り

地元の梓川の魅力を学ぶ良い機会になったと同時に、川で遊ぶときのポイントを、専門家の方々の様々な視点から学ぶことができ、とてもためになりました。今回の実践を家族や、友達にも広め、地元の梓川で安全に楽しく遊んでほしいと思います。

◇当日の様子.....

【実施概要】

○梓川での体験（ディフェンシブスイム、川の歩き方、アグレッシブスイム）

【実施状況】

①ウェットスーツ・ライフジャケット・ヘルメットをかぶって準備万端！！

②ディフェンシブスイム（川での流され方を学ぶ）

○手足をあげる（ラッコのような形）

○頭を動かさない（バタバタしない）

○足がつくところで静かに歩きながら立つ。（あわてない）



③川の歩き方

○3～4人で縦になって支え合いながら、リズムを合わせて横に歩く。

○先頭の方は、水圧を直接受けるので力のある人がよい。後ろの方は、前の人を押しすぎず、しっかり支える。



④川へ飛び込む

○頭から飛び込む。おなかから落ちてでもいい。飛び込んだ後は、岸までアグレッシブスイム（顔を上げてのクロール）で泳ぐ。

◇子どもたちの感想.....

●体験して思ったことは、梓川は水がすごい冷たい。でも、冷たい方が気持ちよくて楽しかったです。やる前は、本当に浮くのか分かんなくて、少しやばそうと思ったけれど、本当に浮けたので、普通にできるようになりました。初めての川は成功だと思います。

●温かいと思ったけど、めっちゃ冷たかった。流れが強くて、流されそうになりかけた。ラッコの泳ぎ方は、シューってなって気持ちよかった。3人か4人で、横にせーので息を合わせていくので感じたのは、一番前にいて、水の圧でどんどんおされて、流れの強い時は絶対に川に入らないようにしたい。

●川で泳ぐことは怖いと思っていたけれど、体験してみたら意外にそこまで怖くありませんでした。3人組を作って、激流を歩いたことや川に飛びこんだことは怖かったけれど、先にやっている人をみたら、とても上手にできていました。私もできると思ってやったら、上手にできました。リバーアドベンチャーが体験できてよかったです。

◇教師の振り返り

- 昨年の Z 小学校に引き続き、D 小学校でも体験させていただきました。上流とは体験する内容が変わりましたが、安全面に配慮していただき、子どもたちも楽しく地元の川に入ることができました。
- 一緒に梓川についての学習も進めた所、上流の安曇 3 ダムのことを全く知らなかったり、泳ぐのには適していない川だと思っていたりとマイナス面のイメージがあったようです。しかしながら、この体験を通して、梓川を自慢の川だと言えるようになりたいとの思いを持つ子どもたちが出てくるなど、川遊びを体験することで、子どもたちの意識も変わってきたように思う。

◇講師の振り返り

- 当日は前日の雨と取水堰放流で濁流&激流となったがその分良い意味での緊張感と達成感がえられたのではないかと思います。災害（水害）などの危機に出会ったとき今日の体験が少しでも役立ってもらえればうれしい。
- 川の激流徒歩横断体験ではグループ皆が協力しないとうまくいかないことを身をもって体験してもらえたことはよかった。
- ゲーム遊びなどではどうしても視野がせまくなるが、全体を大きく見回す必要を感じてもらえたのではないか。
- 今回の川遊びで子ども達が梓川を大好きになってもらえるといい。梓川をもっと好きになって川をきれいにし、梓川を自慢する気持ちになってくれるとうれしい。
- クラスによって生徒の行動や雰囲気が大いに違って面白かった。先生の影響大？
- 生徒の真剣なまなざしと笑顔をみたら苦勞も吹き飛ぶ。フィールドでの子供達の表情や行動はこちらもパワーをもらいます。
- D 小学校は名のごとく梓川とともにある。川を知り、川に親しみ、川の恵みを感じてもらったら幸いです。

◇コーディネーターから

《事前学習 8 月 27 日》

- 信州の川は急流なので色々加工されていて自然の状態ではないので子供達が遊びにくい状態にあることが理解できた。
- そのためか、梓川が身近なはずの梓川小学校の生徒でも梓川の事をよく知らない様子だった。
- 冬の槍ヶ岳から雪解け、そこに生息する動物、植物の様子と共に水のもたらす様々な様子が美しい映像とともに表された良いスライドです。自然のみならず様々な人が登場することもあり、子供たちが興味を持って集中して話を聞くことができていた。

- ◎また、子供たちへの質問も、答えやすいレベルのものに工夫され、子供たちもよく反応していた。
- ◎川での人工物の危険性など、子供たちにとっては思いもかけないことも知ることができ、興味深く聞き入っていた。

《川探検 9 月 4 日》

- ◎倭橋から上流の梓川は景観が下流と全く異なり、自然がかなり色濃く残っているのに驚いた。
- ◎講師の 4 人は真のプロであり素晴らしい講師であった。授業を無事安全に終わらせることへの集中力はすごい。
- ◎前日の雨で川が増水し激流となって授業をどうするのか心配したがさすがにプロでそれなりの工夫でうまくテーマ設定されていた。
- ◎初めてウェットスーツ、ライフジャケット、ヘルメット着用をお手伝いしたが特にウェットスーツの着脱に生徒が苦戦しサポートに時間がかかってしまった。

《川探検 9 月 5 日》

- ◎今は川は危険という風潮で、川を知り、川と親しむ機会が喪失しつつある現在今回の授業は大変身近な場所での、まさにアドベンチャー体験は一生ものの思い出になると思う。
- ◎先生も生徒と同じレベルで川体験できたことは今後の川、海、環境教育につながると思う。
- ◎生徒最初おずおず、終盤は大胆に。慣れてくると川、水の面白さ楽しさを十分味わえたのではないか。（給食いらない、もっとここに居たい）
- ◎徒歩で 30 分往復 1 時間、特に帰りの 30 分は疲れて大変だったと思うが、川と学校との距離感を感じられてバスで移動するよりよほど良いと思う。
- ◎途中で河川管理事務所のパトロールカーが来て 2 名の職員が小さな子供さんたちに川に親しんでもらうことは大変うれしい事だと述べておられ、うれしかった。
- ◎トイレが近くて助かったが緊急トイレ、腹痛、靴脱げ等思わぬハプニングもあり子供対応の難しさを感じたのとサポート人員は少し余裕があったら助かる。
- ◎なにはともあれ子供たちのうれしそうな笑顔や輝き、グループでの協力行動の大切さ上手くいかない子供への手助け等新鮮で感動することばかりでした。

5) SDGs マップづくり

学 校 名 E 中学校（茅野市）

講 師 NPO 地域づくり工房

学 年 1 年～2 年生の混成（40 人）

主な活動場所 学校及び学校近くの JR 駅前

2019 年 10 月 23 日

◇こどもと教師のねがい.....

- ◎身近な地域の環境や人びととの暮らしぶりを SDGs につなげるアドバイスをしてほしい。
- ◎話し合いを通じて、自分たちが地域や社会の中でどのような行動や配慮が必要か考える機会になってほしい

◇こんな学習を.....

- ◎学校周辺の地域を、マップを持ちながら歩いて回り、気付いたこと感じたことを○×△でマップ上に表す。
- ◎学校の地域と SDGs がどのようにつながっているのかを講師の人に話してもらい、講師からは学習の狙いと注意点を話してもらう

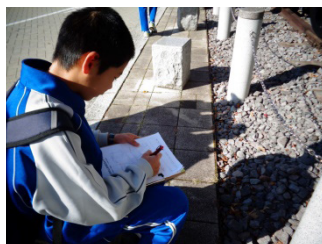
◇気を付けること.....

- ◎町の中を調査するときは調査に夢中にならないように注意をうながす。
- ◎班の中に安全係とタイムキーパーをそれぞれ設ける。

◇当日の様子.....

【実施概要】

- 教室で SDGs マップの説明とねらいを伝える。
- 調査の前にどんなことが発見できるか。ルートをどうするか考えてもらう
- 地域に出て気付いたことを○×△で表す



- 教室に帰り、各自○×△の説明を書く
- ×△が SDGs 的にはどこに当てはまるのか書いてもらう

- 班のみんなに自分の気づきを伝えながら模造紙に共有する
- 班ごとに○×△と SDGs の発表、さらに、行政・市民・私たちの提言を発表しました
- 班ごとに出し合ってもらった「行政・市民・私たちの提言」をさらにクラスの総意を投票で選ぶ。



◇子ども達の感想

- ◎ふだん歩いているところなのに、いざ調べてみるといろんなことが分かった。
- ◎危ないところ、良くないところなど、自分たちも注意しなきゃいけないとおもった。
- ◎まち歩きは楽しかった。
- ◎投票していただくためにみんなに自分たちの班の想いを伝えるのが良かった。

◇教師の振り返り

- ◎生徒たちがしっかりと取り組めたように思いました。
- ◎プレゼンテーションで伝える先生は多いが、自分たちで考えて、実際に地域を調査して、最後にクラス全員で提言を決めるまでのプロセスがとても丁寧にする。

◇講師の振り返り

- ◎こどもたちが自分たちの暮らす地域が SDGs を通じていろんなことを発見してもらえたと思う。それぞれが違う意見を投票という形で最後に合意形成していくことが出来て良かった。

◇コーディネーターより

- ◎事前の打ち合わせに同席するだけでしたが、当日、講師は早めに作業を進んだことを受けて、その場の判断で投票ゲームを加えて、みんなでやれることを考えるようにしたのはよい判断だったと思います。
- ◎SDGs を足元から学ぶひとつの方法として研究されていくといいと思います。

4. 「学校講座」 を使おう！

ここでは、信州環境カレッジ「学校講座」の使い方について提案します。

学校講座は、「地域講座」と違って、活動団体は主催者ではなく、主体は学校の側にあります。そのため、地域に出かけて体験するなどのプログラムでは、学校だけではなく、学校を所管する教育委員会や地域社会（環境行政や地区公民館、自治会など）とのコミュニケーションが必要になる場合があります。

ここでは、学校講座の登録から実施報告までの手続きを追いながら、学校講座を組み立てていく手順をイメージしていきましょう。

ぜひ、活動団体と教師（学校）の両方のコメントを読んでみてください。学校講座を使う両者の立場や思いを理解しあうことは連携の第一歩につながります。

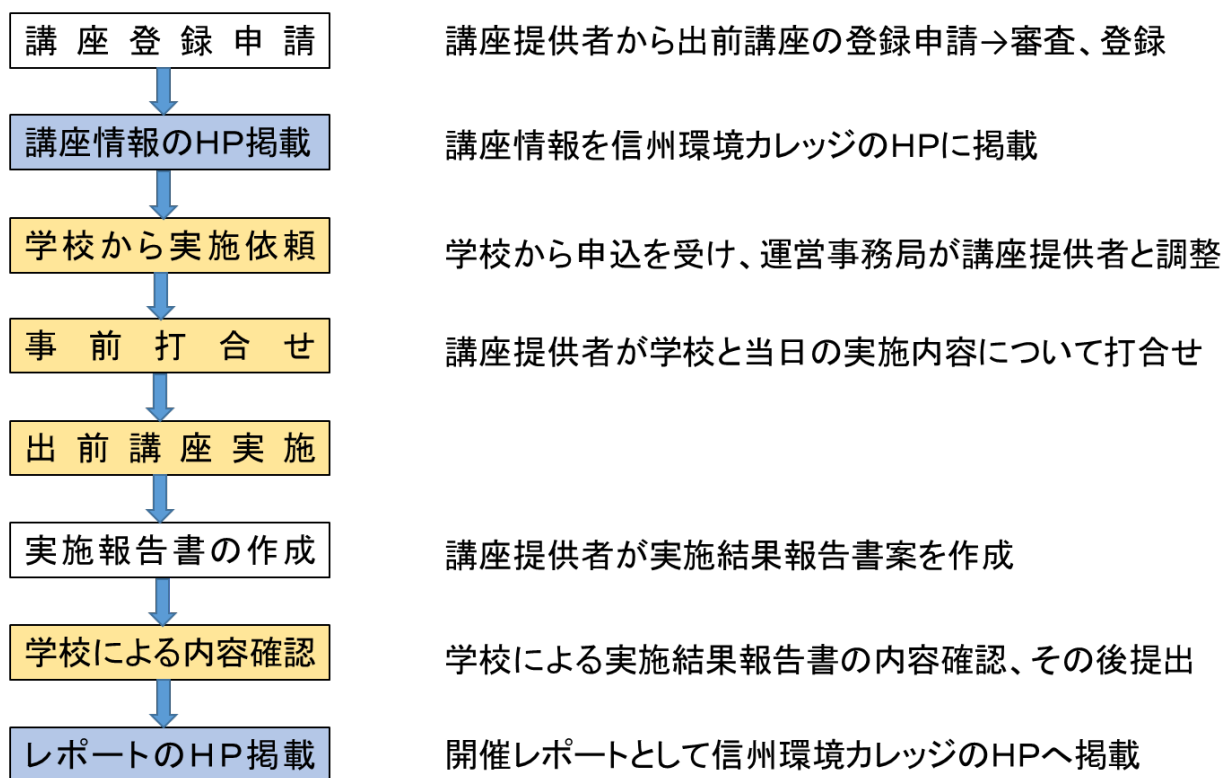


図4：学校講座 講座募集から講座実施の主な流れ

■登録しよう

《活動団体》

これまでに地域子どもたちなどと一緒にやっていることや、自分たちが持っている子どもたちにも伝えたいノウハウなどを、文字に整理して、信州環境カレッジに登録してみませんか。

講座登録申請書（様式 B-1、B-2）に記入することで頭の中が整理されます。

実際に学校でやるとしたらと考えだすと、どんな子どもたちと、どこを使って、どんな準備が必要か、時間はどのくらい必要か、安全対策やけんかにならないようにどんな配慮が必要かなど、いろんなことが頭をよぎります。それらを整理する過程が、自分たちの活動を磨く上での気づきをもたらし、より良いプログラムの提供につながります。

登録申請したプログラムは、県が設置した登録審査会による審査を経て登録となります。

登録されたプログラムが学校で使えるかどうかを判断するのは教師です。

教師は、外部講師が提供するプログラムを利用して、子どもたちにどのような学びをデザインするのかを考えるプロです。

《教師》

学校講座に登録している団体は、環境教育のプロというわけではありません。自分たちのノウハウを社会に生かしたいと思い、努力している人たちです。

すでに学校に協力いただいている活動団体があれば、ぜひ信州環境カレッジの「学校講座」に登録するように勧めてください。

この仕組みをつかうことで、活動団体にとっての位置づけが整理されたり、他校への広がりのお機会となったり、他の活動団体との交流の機会が生まれたりして、提供いただくプログラムの質的な向上につながるかもしれません。また、学校からの謝金や実費の支払の軽減にもつながります。

■どんなワザがあるかのぞいてみよう

《活動団体》

登録用紙を記入する前に、他の団体はどんなプログラムを提案し、実践しているのか、ざっと閲覧してみましょう。

同じようなことをやっている団体もあるかもしれません。その団体のプログラムは自分たちとはどんな点が違っていて魅力的なのか、または自分たちの優位性があるのか、探してみましょう。

自分たちのプログラムが他にはないオリジナルなものであることを確認できるかもしれません。その場合も、違ったテーマやフィールドを扱うプログラムから学べるノウハウがあるかもしれません。

《教師》

地域とのつながりを感じながら環境について学ぶことをデザインする上で、登録された多種多様なプログラムはたくさんのヒントを与えてくれます。実際に登録されたプログラムを利用するかどうかは別として、閲覧をお勧めします。

関心を持ったプログラムが、登録している活動団体による開催エリアが学校の所在地とは違う場合もありますが、活動団体に相談してみましょう。協力してくれる場合もあれば、類似した活動をしている団体を紹介してくれる場合もあります。

利用を検討される場合、WEB 上から申込みをする前に、一度、登録された連絡先に相談を入れることをお勧めします。その目的や日程、回数、規模、開催地などについて大筋で了解を得たうえで、学校講座の仕組みを使って進めていくことを確認しておく、後の調整がスムーズです。

■打合せしよう

《活動団体、教師》

活動団体は、利用の申込みがあったら、まずは事前の打ち合わせのために、学校に出向きましょう。どんな場所にある、どんな雰囲気の学校で、教師の子どもたちへの思いやプログラム利用の動機、教科や単元の中での位置づけなど、共有しましょう。

両者ともに忙しい中での打合せを効率的に進めるために、中信地区環境教育ネットワークが使っている「打ち合わせシート」（61 頁参照）を利用することをお勧めします。シートの上から順番に、両者で確認しあいながら、記入することで、たいがいのことは整理できます。記入し終えたらコピーして、両者で持ち帰ります。

野外活動を伴う場合は、必ず両者で一緒に下見をします。安全管理が必要な個所は役割分担を確認しておきましょう。

打合せに出席した教師は、他の学校関係者（校長や事務、一緒に担当する教師など）と情報を共有するために使ってください。

■記録しよう

《活動団体》

学校講座の仕組みを利用した場合、信州環境カレッジ事務局に、以下の書類を提出する必要があります。**各所式はカレッジのポータルサイトをご参照ください。**

①実施が決まったら

経費補助申請書（様式 B-3）、収支計画書（様式 B-4）

②実施し終えたら

収支決算書（様式 B-4）、実施結果報告書（様式 B-5）

経費補助請求書（様式 B-6）、交通費精算書（様式 B-7）

書類をまとめるのは面倒なことです。登録したときよりも、いっそう自分たちのプログラムを見つめなおす機会になります。何にお金がかかったのか、教師や子どもたちはどんな反応だったのかなど、自分たちの活動をより良くするための貴重なデータとなります。

《教師》

活動団体が作成する実施結果報告書（様式 B-5）には「受講者の感想」「主催者からのコメント」「講座写真」を掲載する欄があります。これらの作成に協力して下さい。とりわけ、写真の扱いについては、打合せ時にも確認しますが、再度、教師の側から保護者等への確認を行うようにして下さい。

■ふりかえりをし、発信・交流しよう

《活動団体・教師》

実施結果報告書などの記録がまとまったら、それらの確認を兼ねて、実施したことへの両者の評価や課題認識などを共有しましょう。それも記録として残しておく、担当教師が異動された場合も、引継ぎに利用されることでしょう。

公開することで確認できた内容で、外部に実践事例を紹介する報告書などをまとめましょう。そして、信州環境カレッジが主催する実践交流会などで発表しましょう。教師も、教科研究会や所属学会などで積極的に発信しましょう。

5. 地域にコーディネーターを育てよう

地域社会と学校とをつなげて行われる環境教育をどのように広めていけばいいのか。そうした活動の実践者（学校関係者やプログラム提供者、コーディネーター的な役割の人たちなど）による意見交流を公開の場で行い、ノウハウや課題の共有を図りました。このときの議論の概要をご紹介します。

■実践交流会の開催概要

名 称	信州環境カレッジ実践交流会 公開座談会「学校講座を活かすコーディネーターの役割」
日 時	令和元年12月2日（月）午後3時～5時（終了後、任意の交流タイムあり）
会 場	塩尻市市民交流センター「えんぱーく」 イベントホール（5階）
主 催	信州環境カレッジ事務局（長野県環境保全協会）

タイムテーブル

15:00	開会、進め方の説明
15:05	公開座談会 司会者：松本大学准教授 中澤朋代様 助言者：信州大学特任教授 渡辺隆一様 出席者：池戸通徳様（特定非営利活動法人南信州おひさま進歩） 桐原真幸様（中信地区環境教育ネットワーク） 小峰邦良様（リトルピークス） 斉藤優一様（松本市教育政策課教文センター） 清水久美子様（環境カウンセラー） 鈴木喜一郎様（寿さと山くらぶ） 中林直子様（中信地区環境教育ネットワーク） 日野谷則男様（中信地区環境教育ネットワーク） 平島安人様（自然エネルギーネットまつもと） 福江佑子様（特定非営利活動法人生物多様性研究所あーすわーむ） 山田直美様（特定非営利活動法人わおん） 横山朝征様（塩尻市教育委員会） 渡辺ヒデ子様（みどりの市民）
16:45	休憩（公開座談会の終了）
17:00	交流サロン会（2階「フリーコミュニティスペース」にて） ※傍聴者も交えて、お茶などを飲みながら交流
18:00	閉会

写真：公開座談会の様子



■こんなことが話し合われました

【活動団体の方の声】



「体験ばかりやっていていいの？」という声もある。そういう中で、コーディネーターが他の専門分野の人たちとつないで、より深い学びをデザインしてくれる。

つい本音で話してしまうのをコーディネーターが円満につないでくれる。私のストレートな性格との均衡をとってくれる。



私一人で学校に出向き、調整してきた。講師としてやっていると、他でやっていることを知らないなので、横のつながりを広めていけばいいなと思った。

信州環境カレッジのおかげで、年間何件も学校での講座をさせてもらえるようになった。他にも高校や大学、育成など、たくさん抱えているけど、一人ではできなくなっている。とても申請書や報告書など手に負えない。中信地区環境教育ネットワークのサポートがあって活動できている。



子どもたちが持っているものを引き出すにはどうしたいのか。活動団体の側にも技量や技術が必要となる。コーディネーターからいろいろと気づかされて、私たちも勉強してきた。

信州環境カレッジの補助金だけではなく、国や市町村、民間助成財団などの資金も紹介し、コーディネートしてもらえる。



あまりにも自分たちの地域と、中信地区での取組みの様子との違いがあると感じた。信州環境カレッジの事業がある間に、県内に広めていってほしい。

コーディネーターが
お手伝いすることで、
講師は思いっきり
活動できるんだね！



《教師、学校の立場から》



教師は、講師の人柄を知りたいと思う。子どもの話を聞いてくれる方なのか、それが一番大切なことだ。そういう情報をコーディネーターが提供してくれる。

このような体感型の学習は教師にはなかなか提供できない。こういう体験ができて子どもたちは幸せだと思った。このような学びの体験を、いろんな学校で取入れてもらえるといいのではないかと思った。



教師は転勤が多い。地域にコーディネーターがいることで、継続性を持たせることができる。

先生ではできないことを、
講師が手伝えるようにすると、
わくわくした授業になるよね！

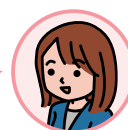


《コーディネーターの立場から》



学校と講師をつなぐところにコーディネーターがいる。その輪の中に、行政、今回は信州環境カレッジがある。いろいろな支援がからみあって支援がある。

素晴らしい講師を知って、その生きざまを知ってそれを学校に知らせる。
行政の仕組みを知って、それを学校に知らせる。



学校の教師は謝金を支払うという認識が薄い。カレッジの仕組みを使うことで、きちんとお金の話ができるようになる。

コーディネーターは「透明な接着剤」。学校には学校の思いがあり、講師には講師の思いがある。それらをそれぞれに伝え、そこに個人的な思いは強く出さない。基本的には講師の強みを引き出し、教師の思いにつなげていく。





地域と学校の橋渡しを10年近くやってきたが、定着させることは難しかった。コーディネート機能には、コーディネーターの資質や技量も大切だと思う。

透明人間になるの!?
それってカッコいい!



《助言者》

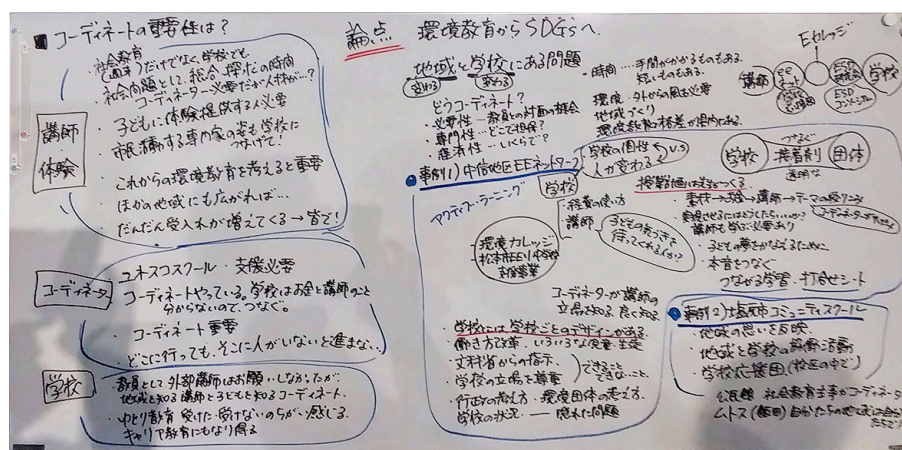


授業をつくるのは教師の仕事。教師が子どもたちの様子を見ながら、コーディネーターが活動団体を紹介し、調整や手続きのサポートがあると、教師も授業計画が立てやすくなる。

こういう経験をした教師が転勤先でも信州環境カレッジの仕組みを使うことを学校に働きかけてほしい。

信州環境カレッジは5年間の時限事業なので、こういう取組みが県内に定着できるように、市町村でも仕組みづくりを進めてほしい。

こういう授業のしくみがずっと
続いて、で子どもたちの
楽しそうな声が山にひびくと
いいなあ。僕はじゃましないよ!



写真：白板に書き込まれた出席者の声

環境学習の組み立て例

H28.3.1 中信地区環境教育ネットワーク

環境学習の流れ

楽しむ

● 夢中になって遊ぶ、畏怖を感じる、美しさに感動する等、理屈抜きで自然を感じる体験をする

活動例

- 野外体験 ● 遠足 ● 登山
- キャンプ ● 外遊び

気づく

● 自然の中の不思議さ、面白さに気づくと同時に、課題や困難にも気づく

活動例

- 自然観察 ● 動物飼育
- 植物を育てる ● 昆虫採集

実験・調査

● 調査や実験を通して、課題を理解する

活動例

- 畑づくり ● 生ごみ堆肥化
- 放射線・水の実験
- 野生動物の痕跡探し
- ごみ処理・下水処理見学

力をつける

● 課題解決に向けて何ができるかを考える

活動例

- 道具の使い方を知る
- 協力して作業する経験をする
- 地域の歴史や現状を調べる
- 地域課題を探して解決方法を考える

社会参加

● 行動する

活動例

- 温暖化防止・CO₂削減
- 里山整備 ● 環境汚染防止・削減
- 省エネ・ごみ減量・リサイクル

学習例（松本市A中学校）

[登山で高山（乗鞍）の気象や自然を体験した]

＜by 学校行事＞

[上高地でキャンプし、野外活動や宿泊を楽しんだ]

＜by 学校行事＞

[ガイドの案内で上高地の自然観察をした]

＜by 学校行事、上高地ネイチャーガイド協議会＞

[登山・キャンプの振り返りで上高地と四賀の違いについて考え、実は四賀の自然についてあまりよく知らないことに気がついた]

＜by 信州まつもと山岳ガイド協会やまたみ、NPO 地域づくり工房＞

[四賀の水を調べた]

＜by (株)環境技術センター＞

[バイオマスエネルギーについて学習した]

＜by 自然エネルギーネットまつもと＞

[実験で放射線を調べた]

＜by (株)環境技術センター＞

[畑で作物を作った（シカに荒らされた）]

＜by クラス活動＞

[地元熟練林業士による木の伐採を見学し、地元の山や木の話聞いた]

＜by 四賀林研＞

[学有林の間伐材でボヤ炭づくりをした]

＜by 四賀林研、自然エネルギーネットまつもと＞

[バームクーヘン作りと木の学習をした]

＜by 寿さと山くらぶ＞

[近隣で集めたバイオマス燃料を使って地元で収穫した食材を調理し食べた]

＜by 安曇野ふるさとづくり応援団、自然エネルギーネットまつもと、四賀林研、寿さと山くらぶ＞

[地元の猟師から命をいただく話を聞き、シカ肉を焼いて食べた]

＜by 四賀林研＞

[エネルギー利用について考えるワークショップを行った]

＜by NPO 地域づくり工房＞

持続可能な社会づくりに参加

資料3 中信地区環境教育ネットワーク 「打合せシート」



打合せ日時：	年	月	日	場所：
打合せをした人：	学校			
	団体			
支援をする団体の名前：				連絡先：
実施する学校の名前：				連絡先：
プログラム名：				
支援してほしい内容 (教えてほしいこと、先生の願い)				
学年・クラス：	人数：	担任(代表)：		
活動する日と時間：				
講師集合時間：	講師集合場所：			
活動する場所：				
活動の際の児童生徒の服装等：				
大まかな活動内容：				
当日までにしておくこと：	団体			
(事前指導)	学校			
当日準備する物：	団体			
	学校			
気を付けること： (危険回避にむけて)				
講師の名前：				
講師料：	円	×	人	=
材料費等：				
支払い方法：				
保険の確認：	傷害／賠償			
マスコミ取材：	可	不可		
写真撮影と使用許可：	撮影者			
(打合せで許可を得た写真と目的以外の使用はしません。学習報告はeeネットの実践例として報告書等に使用されます。)	使用方法	・学習報告(WEB掲載あり) ・団体WEB		
		・その他()		
	使用できる写真(例・個人が特定できないもの・担任の許可を得たもの)			
	確認方法			
備考：				
(雨天の場合、その他配慮が必要な事等)				

おわりに

信州環境カレッジの「学校講座」が、学校と県内の活動団体とがつながって、子どもたちに魅力ある学びを提供しています。

こうした取組には、企画調整や事前の準備が大切です。そして、事後も学校と活動団体との間で総括や相互評価が行われることで、より良いプログラムに成長することでしょう。

また、他の学校や地域でどんなことをしているのか、知り、ノウハウを交流することで、それぞれの活動の質が高まるとともに、県内の環境教育の発展につながります。

そのような活動を支えるコーディネート機能が地域にあると、より効果的に実施できることが確認されました。

あなたの学校や地域でも「学校講座」を利用してみませんか。実践の蓄積の中から、地域にコーディネート機能が育ってくるのではないのでしょうか。

また、市町村においても、信州環境カレッジの仕組みを活かしながら、SDGs に向けた「学びと自治」を育てる仕組みづくりが進められることを期待します。

この小冊子がそのようなきっかけになることを願ってやみません。



「信州環境カレッジ」運営事務局

一般社団法人 長野県環境保全協会

〒380-0835 長野市新田町 1513-2 (82 プラザ長野)

TEL : 026-237-6620 FAX : 026-238-9780

E-mail : shinshu-ecollege@nace-portal.jp